

若者の《住まい》の確保が大切だ！

——若者とシングル・ペアレントの居住支援に取り組む先駆者たち

葛西 リサ

(追手門学院大学准教授)

藤田 琴子

(一般社団法人青草の原代表理事)

山中 真奈

(シングルズキッズ株式会社代表取締役)

荒井 佑介

(NPO法人サンカクシャ代表理事)

司会 青木 尚人

(本研究所研究員)

はじめに

青木：これより、立教大学社会福祉研究所主催、第56回社会福祉のフロンティア「若者の《住まい》の確保が大切だ！——若者とシングル・ペアレントの居住支援に取り組む先駆者たち」を開始します。本日司会を務めます、立教大学社会福祉研究所で研究員をしております青木と申します。いつもは社会福祉の担い手の歴史の研究をしております。よろしくお祈いします。

開催に先立ちまして、社会福祉研究所の所長がご挨拶することになっていたんですが、あいにく所長である菅沼が新型コロナに感染してしまいました。今日この場での参加ができなくなってしまいました。なので、今日は遠隔で参加をして、その感想、コメントを私があとで代読をさせていただくということで、ご挨拶に代えさせていただきます。代わりとしまして副所長である前田から、最初の言葉を差し上げたいと思います。よろしくお祈いします。

前田：社会福祉研究所で副所長をしております、前田と申します。よろしくお祈いいたします。本日はお暑い中たくさんの方にお集まりいただき、誠にありがとうございます。社会福祉研究所では、このような社会福祉のフロンティアという形で、1991年に1回目のシンポジウムを行っております。それから1年に2回ずつぐらいのペースで、ずっと行ってきました。今回が第56回社会福祉のフロンティアということで、「若者の《住まい》の

確保が大切だ！」というテーマで行わせていただきます。

実は、50回を最後に対面でやることはかなわず。51回から55回までの間の5回というのはオンラインで、ずっとこのフロンティアを行ってきたんですけれども。ようやく56回、今回は対面ということになりました。お暑い中ですが、ぜひ最後までご参加いただければと思います。そして、大変たくさんの方にお集まりいただいた上に、4名の講師の方、葛西さん、藤田さん、山中さん、荒井さんと、素晴らしい登壇者の方にも来ていただくことができました。

では、基本的には研究員の青木さんが、これから司会をしてくださると思いますので、そちらにお任せしたいと思います。本日は最後までよろしくお祈いいたします。これでご挨拶に代えさせていただきます。

青木：ありがとうございます。次に、本日のプログラムについて確認をします。最初に、葛西リサさんから45分間お話をいただきます。葛西さんはいま、追手門学院大学の准教授で、神戸大学で博士号を取得されました。葛西さんは一貫して、ひとり親に対する居住支援を対象に調査研究を行ってきました。本日は、日本における若者に対する居住支援のあり方を、まずうかがってこうと思っています。

次に、3名の実践家をご紹介します。まず一人目は、一般社団法人青草の原の代表理事の藤田琴子さんです。藤田さんは国際基督教大学を卒業した

あとに、専門学校に通学して社会福祉士の資格を取得されました。母子生活支援施設で実践する中で、若者の居場所づくりに意義を見だし、一般社団法人青草の原を創設しました。二人目は、シングルズキッズ株式会社代表取締役の山中真奈さんです。「シングルズキッズたちを楽しくHAPPYに！」をミッションに、2017年に東京都世田谷区で地域開放型・シニア同居型・シングルマザー下宿「MANAHOUSE上用賀」をスタートしました。現在では、立教大学がある豊島区とも連携しながら、若者向けに住まいを提供しています。最後は、NPO法人サンカクシャ代表理事の荒井佑介さんです。荒井さんは、大学在学中からホームレス支援や子どもの貧困問題に取り組み始めました。生活保護世帯に対する、中学校3年生向けの学習支援を長く続けてきた経験を踏まえて、NPO法人サンカクシャを立ち上げました。サンカクシャでは、15歳から25歳前後までの親や身近な大人を頼れない若者の「居場所」や「住まい」「仕事」などに対する支援をメインに活動をしています。お三方からは、20分でご自身の実践をお話いただけます。

予定では、そのあと4人でディスカッションと質疑ということになってるんですが、時間がとてもタイトになっております。終わりが4時半になってるんですが、ちょっと後ろになる可能性があります。そこだけご了承いただければと思います。それではまず、葛西さんから話をいただければと思います。よろしくお祈りします。

講演

葛西：こんにちは。暑期中、皆さんありがとうございます。追手門学院大学地域創造学部の葛西リサと申します。本日は「多様化する居住貧困・政策の課題・民間の役割」と題しまして、皆さんと若者の住まいの貧困について共有をさせていただきますと思っております。どうぞよろしくお祈りします。

まず自己紹介させていただきます。私は、この過去20年間、母子世帯の居住貧困について研究をしてきました。2020年、コロナの真っただ中だったんですけれども、LGBTQの住宅問題について着手しはじめました。これについては、長らく母子世帯の住宅の不利をいろんなところで講演をする中で、当事者の方から「シングルマザーも大変だけれども、われわれもすごい大変な思いをしてる

んですよ」っていうような声が挙がってきまして。じゃあ、いちどやってみようかということで、調査をスタートしました。去年は、横浜市男女共同参画センターと、非正規シングルの女性たちの住宅問題について、可視化する必要があるだろうということで調査を実施してきました。一連の研究に関しましては、こういった書籍⁽¹⁾にもまとめております。図書館にもあると思いますので、ぜひ手に取っていただけたらうれしいです。

続いて、私の関心の所在は何かについてご説明いたします。初めに今回のシンポジウムのお話をいただいたときには、「20年も研究してるんやから、葛西さん、シングルマザーの住宅問題を45分語ってみたら？」と言っていたいたんです。そうこうしているうちに、登壇者が決まっていまして。ここにいらっしゃる若い方たちはシングルマザーのシェアハウスや若者のシェアハウス、課題をかかえたユースのための居場所を実践されてる方で、第一線で活躍されている方ばかりです。そんななか、私が一生懸命現場の話をするのも何なのかなと思ひまして。ならば、そういった活動に横串を指すような話、たとえば、なぜ住宅問題が発生しているのだろうか、また現代の居住貧困とは何かということを総論的に話しして、若い方々にパトタッチしようということで今回のテーマにおちつきました。

はじめに、どうして多様な住宅問題が次々と発生しているのかということについて。住宅、建築の領域では、住まいは、人間の生活を包み込む器である、というようなキーワードをよく使います。住宅、つまり、「ハコ」について、戦後、ほとんど変わっていない。だけれども、そこに住む「ヒト」の中身が、かなりドラスティックに変わってきているっていうのが昨今の状況です。

住み手側の問題は、多様化してきているのに、住宅のデザイン、例えば、間取りなども、住宅の確保の方法も、さらにはそれを支援する行政の仕組みも、ほとんど変わっていない。当然それではミスマッチが起こります。そのミスマッチが住宅問題というかたちであらわれてくることは必然なのです。

続いて、本日のトピックです。皆さんに、事前に資料をお渡ししていると思います。45分では語り切れない、ボリュームミーな資料になっています。後半のほうは、多くの事例を入れてます。写真を見て文字を読めば、「全国でこんな取り組みがある

のか」とわかってもらえる空き家を活用したような事例がいくつか入っています。それについては時間があれば触れますが、なければお手元で見て参考にいただければと思っています。

本報告では、1番目に、多様な住宅問題の発生、なぜ起こるのかということについて、皆さんと共有をしたいと思っています。2番目に、世帯の多様化と住宅問題というところで、私がこれまで扱ってきた対象の事例について、母子世帯、それからシングル女性、そしてLGBTQ+という方々ですね、の住宅問題についてお話をします。これらの話題は、それぞれきちんと話せば相当な時間が必要ですが、今日は概要のみ説明させていただきます。そして3番目に、施策の綻びを繕う民間支援の役割と可能性について。昨今は空き家がどんどん増えてきています。私がこの研究に着手した20年前は、不動産の方は私にとっても冷たくて、低所得の方には住宅は貸しませんよというふうにはっきり断言されていたんです。最近ではやはり、困った人もいる、一方で住宅も空いてきている。ということで、ともに、連携して、いろんなことを解決していこうよという芽が出てきています。その中で、今日登壇される若い人たちは、そういった空き家を使って、いろんな活動を始められているんですよ。私の報告では民間の空き家を使ったシングルマザー向けのシェアハウスに特化して、事例を提供していますけれども、このあとに続く方たちは、ユース、若者の居場所であったりとか、若者のシェアハウスなど、リアルなお話を提供いただけたらと思います。そして、4番目にまとめということで、進めていきたいと思っています。

(1) 日本の住宅政策は誰を救うのか

初めに、日本の住宅政策は誰を救うのかということについて、皆さんと考えていきたいと思っています。日本の国は、戦後420万戸ともいわれる戦災の住宅不足から、住宅政策がスタートしています。敗戦国ですので、早急にクオリティのいい住宅を大量に提供できるかっていうとそうではなかった。かなり深刻な住宅問題を抱えながら、進んできた国でもあるんですよ。早急な住宅供給のために、日本は階層別に住宅を提供していこうということをしました。

持ち家を所有する余裕のある人は「自力仮設」ではないけど、自助努力で住まいの確保をしてもらう。そのために、政府系の住宅ローンの仕組み

を作って資金を融資する。この仕組みが、住宅金融公庫法として1950年に成立しています。低所得階層については、国が救済しようということで、1951年に公営住宅法をスタートさせています。当時は住宅それ自体がない、お金があっても住宅がないという状況でした。中間層といえども、住むところがないという問題があった。そこで国は住宅公団という組織を作って、公団住宅というものを中間層にどんどん供給していくっていうことをやったんです。ただ、公営住宅がががが増えてくれば、こんな住宅弱者の問題っていうのは発生しなかったかもしれないんですけども。国の方向性としては、やはり家族を形成して、持ち家を持ってくれる人、そういう人たちに対して積極的に支援をしていきましょう、という流れがありました。結婚予備軍の若い人々に対しては公団住宅であったりとか、民間賃貸住宅を提供し、結婚をして子どもが生まれたら、持ち家に誘導していくというのが、日本の住宅政策の流れだったんです。

その結果、日本は圧倒的に持ち家率が高い国になりました。全国平均が6割強です。東京とか大都市圏はもう少し少ないですが、地方に行くと、8割、9割が持ち家というところもあります。年代によっては、もう80代、90代は、圧倒的に持ち家率が高い状況になっています。一方で公営住宅については、もう残余化が進んでおまして、2018年の住宅土地統計調査のデータでは、全住宅ストックの3.6%です。これしか困った人に対する支援がない、という状況なわけです。

戦後の日本の住宅政策のもう一つの特徴は、標準的な家族をターゲットにしてきた点です。しかし、当時政策が想定していた男性稼ぎ主モデルを前提とした「標準的な家族」はいまやメジャーではありません。とはいえ、その傾向は、いまもまだずっと続いてきています。

具体的にお話をします。たとえば公団住宅・URについていえば、開設当時、家族世帯をターゲットにしていた。時間の経過とともに民間の賃貸住宅もどんどん増えていく。また、持ち家を所有する人も増えていく。公団住宅は、広大な土地を確保して開発されたものが多いので、郊外に立地するところが多く利便性が悪いという不利もある。なので、早い段階で空きが出てきた。空室対策のために、単身者も対象にしようとなったのが1970年です。

一方、住宅金融公庫、国の金融機関になりますけれども、これは1981年に40歳以上ならば単身世帯でも融資しますよと融資基準を緩和しています。これは家というのは、家族を形成する人々のためのものであって、単身世帯のものではない、だから、そこは支援しませんよ、という明確な線引きです。しかし、それでは時代に合致しないということで、40歳の人であれば単身でもOKとし、そして1993年には年齢制限を撤廃して、ちゃんと資力があれば貸し付けをしましょうということになりました。さらに、去年、ようやくLGBTQの人たちがペアローンで住宅を買うときには、「フラット35」という金融商品が利用できるようになりました。

そして肝心の公営住宅は、1980年に、法改正されました。それまでは、家族のみ、親族がいる人だけに入居を限定してたんですが、高齢者も対象とするようになりました。単身の高齢者は民間賃貸住宅に入ろうとしても拒否されます。つまり、施設、あるいは病院以外の行き場がなくなる。じゃあ、そこは公営住宅が救済しましょうということで、1980年代には法律が改正され、高齢者、60歳以上の男子、そして50歳以上の女子、これは単身入居を許可しましょうかというふうにはなりました。だけど、この年齢以下の人だって、単身で困ってる人もいるわけですね。それでも日本の国は、そこはいつか結婚するでしょう、いつか家族を形成するでしょう、いまちょっと踏ん張ってよ、っていうところで、ほとんど支援をしてこなかったという状況です。

1992年に再度法改正をして、同居親族の要件を撤廃しました。よって、法律的には、誰を入れてもいいことにはなったんです。ただ自治体のほうでは、手頃な住宅を多く準備できるわけではありません。ですので、できれば家族とか、そういう人に入ってほしい一方、「若い人は働けるよね」、「シェアハウスでもいけるよね」っていうことから、ほとんどの自治体で若者を積極的に対象としますというところは、ほとんど見受けられないというのが昨今の状況なんです。なので、若者で、住宅に困って、どういう支援が受けられるのといったら、ほとんど支援がないというのが現状なんです。

続いて、なぜ住宅問題が発生するのかということなんですけど、日本は、先ほどもいいましたが、持ち家率が非常に高い国です。これは自助努

力で6割の国民が住宅を獲得しているということを意味します。あと、どんなストックがあるのかということ、多いのが、民間賃貸住宅です。これについては、公的補助はほとんどございません。つまり、商品です。どうやったら利益が上がるかということを目的に建設されてるものなので、「住宅に困ってます」、「もしかしたら家賃払えないかもしれません」、「困ってるので入れてください」といっても、受け付けてもらえないというのが前提です。これは仕方がないことです。不動産業界は、自分の資産を守るっていうことが仕事になりますので。

その一方で公営住宅はというと、先ほども申し上げました、たったの3.6%に、住宅に困る人が集中するわけです。さらに、住宅が欲しくても、公営住宅を望まないという人もいます。たとえば母子家庭でいいますと、すごくエリア性を重視するんですね。たとえばいまの家賃は高いけど、近所に親がいて助けてくれる。子どものことをとても理解してくれる学校の先生がいる。「この学校の先生やから、私は子どもを安心して預けて、いろんな相談を受けてもらって、働きに行くことができる」など、地域のインフラがすごく重要なんですよ。公営住宅が空いてるから「あっち行きなさい」っていわれても生活ができない、それこそ、「生活が死んでしまう」っていうふうにおっしゃられるお母さんたちも、結構いらっしゃいます。なので、住宅政策というのは、単に住宅を提供すればいいわ、ではなく、どこで住むかってことが重要で、それを尊重できるように仕組みにしないと人は救えないと私は思います。住宅だけを提供して、インフラを軽視するというのは、本当の意味での自立支援じゃないというふうに思うんですね。もちろん、公営住宅には、空室もいっぱいありますが、立地のいい団地は激戦です。ほとんど入れない。東京なんか全国一の激戦区ですよ。

なので、高齢者も困っている、障害者も困っている、母子世帯も困っている、多子世帯も困っている、いろんな人が困っている。その上コロナになってさらに困って、この3.6%に集中しているわけです。絶対に多くが落ちます。結果どこへ行くかっていうと、民間賃貸住宅しかないということになります。資力がないので、ローンは借りれず、持ち家を所有することはできない。となると、やはり民間賃貸住宅に依存せざるを得ないという状況になってくるんですが、先ほども申し上げまし

たが、民間賃貸住宅っていうのは事業者からみれば商品です。一生懸命資産をどうやって高めていくかということが仕事です。その中で、仕事の状況とか、収入審査っていうのは、非常に厳しく求めますし、不安定であればあるほど、連帯保証人をいただきますよということになってしまいがちです。資力があっても、高齢や障害やLGBTなどが排除されるということも言われています。高齢になると孤独死のリスクも上がってくる。なので、ちょっと民賃では引き受けられません。見守りがあるんだったら大丈夫なんですけどね、というような状況でお断りになれることは多い。

障害のある方についても、やはり住宅自体がそのスペックになっていないとかですね。段差が多いとか、廊下幅がすごく狭いとか、日本の住宅はすごく狭小ですので、それがなかなか適応できないという問題もあります。そしてLGBTQといわれる人たちにとっては、同性で入居したい、自分たちは堂々と愛する者同士として入居したいというふうにも思っても、不動産のほうでその知識がなければ、「どういうこと?」。偏見とか差別的な状況でお断りになれるっていうケースもあります。いくらお金があったとしても、うちはちょっと厳しいです、というような状況で断られてしまうということもあるわけですね。ただ、最近では空き家も増えてきていますので、入居基準が緩いところもあります。やはり収入が低ければ、それに付随して質も悪くなってしまふというのが民間賃貸住宅ですので、入居できても、劣悪なストックにお住まいの、低所得階層の方はたくさんおられるというのが現状になるわけです。

じゃあ、住宅政策は誰を救ってきたかということなんですが、当時政府が想定していたマジョリティーです。家族を形成する持ち家層を、積極的に支援してきたんだということです。もう一方で、低所得者に対するセーフティーネットっていうのは、最低限。かつ、この最低限のセーフティーネットすら、家族を形成する人に対して優先されてきた、というのが回答になるのかなと思います。

(2) 多様化する住宅問題事例とは

2番目に、多様化する住宅問題の事例についてご紹介します。ケース1です。いままで標準家族であるとか、マジョリティーであるとかっていうような人を、日本の住宅政策は救ってきたんだという話をしましたけれども。シングルマザーにつ

きましては、いったんは「標準世帯」を形成しているんですよね。だけど、この標準世帯を離脱することは罰に等しい、非常に厳しいものがあります。母子世帯は、離婚前後に、多くのシングルマザーが、結婚しているときの家を出るという傾向があります。そのときに、住宅確保の困難に直面するわけですね。なぜかという、結婚するときには仕事をしていない。専業主婦であったり、あるいは育児と仕事を両立するために、パート労働や働き方を変えていたりとかですね。そういうことによって、働き方のランクをぐっと落とされている方がすごく多いんです。これはすべて家族のためにした選択ですが、離婚のときにその選択というのは、住宅を確保する際にすごく不利に働きます。この状況をいろいろな媒体で発信していただくんですが、SNSなどでは、自助努力やろうって、心ない言葉をいただくこともすごくあります。しかし、これは自助努力ではなくって、やはり社会の構造的な問題です。「結婚をしているときに働き続けなければいいだろう」って言われますが、育児をしながら働けるような社会になってるかっていうと、皆さんもご存じのとおり、全くそうならないわけです。

不動産業界の方にインタビューしますと、結婚される前提で住宅を二人で借りに来られたら、そりゃ、経済力の高い夫のほうに、契約しましょうよということで、勧めますといわれます。妻のほうでいえば、やはり妊娠するかもしれない。そのときに仕事を辞められるかもしれないってことを考えると、男性のほうに契約者になっというほうがいいんじゃないですか、と勧めることになる。住宅を買うときもそうです。「だんなさんのほうが資力もおありになるので、だんなさんのほうの収入の審査で通したらどうですか」となる。女性の側がそこで、私がローンの債務者になりますと主張しても「審査が下りるかな?」と。そういう状況がまずあるわけですね。

なので、結婚するときには致し方なく、男性の名義であったり、男性の契約であったり、そういう状況で住宅に入っていくわけです。そうすると、誰が強い、誰が家主っていうと、夫なわけですよ。なので、離婚のときには、やはり家を出ざるを得ないです。ローンがある家にとどまったとしても、もし夫が住宅ローンを滞納したら、自分も出ていかなきゃいけない。ならば撤退しよう、出て行こうというような選択をされる方が結構い

らっしゃる。つまり、標準世帯から離脱するシングルマザーの住宅問題は非常に厳しいんですが、これは自助努力でも何でもなくて、やはり、男性が働くことが優先され、男性が住宅の所有者になることが前提の社会の構造の問題だっていうことを、皆さんに共有したいということが一つです。

一方、家族であることが不利に働くということもあるんです。離婚が不正立のプレシングルマザーという方々の問題です。事実上婚姻関係も破綻しているし、夫もいない、遺棄されているとかいう状況でも、もし家を借りようとしても、法律的にシングルマザーとしての手当が受けられないために、不利になるとか。離婚できていないその状態で、不動産業界に駆け込んでいって、住宅を貸してくれといっても、状況を聞くと、離婚はできていない、わずかばかりのパート収入がある。普通であれば、ここに児童扶養手当が加算されるけれども、それもない。だったらば、ちょっと厳しいよねっていう回答になるんです。なので、離婚したい、けどできないという状況の人は、家族を解消できないがゆえの不利がある。コロナでも、結婚している、離婚したいというふうに関係ない状況の中で、コロナの手当が、母子家庭でもないので受けられなかったというような案件もありました。シングルマザーの住生活問題は、標準家族を撤退することの罰と、家族であることの不利双方のはざまにあるといってもいいかもしれません。

それから、家族を形成しない人々の住宅問題ということで、若年単身者っていうのは、家族を形成する、いつか家族を形成していく予備軍なんだというような意味合いから、支援の不必要な対象として、長らく放置されてきました。昨今の傾向では、未婚化、生涯未婚率もどんどん上昇しています。「だから結婚しなさい」ではないんですよ。これがもう実態なんです。このままずっと進んでいくとするならば、政策の側を変える必要がある。家族の形をかつての形に戻すのではなく、外のインフラとかハードをやっばり変えていかなないと、人間は幸せにはなれない。

特に、この未婚化とか、非正規化の進行は、女性の居住貧困を露呈させる結果になりました。女性は昔からずっと貧困だったんですよ。だけど、それが可視化されなかった背景には、結婚をして、そして夫の名義で住宅を獲得して、というようなことがあったので、結婚がセキュリティになっ

ていたという時代が長らくあったからです。よって、女性の貧困化とか、女性の居住貧困というのは、ほとんど表に出ることはなかった。これだけ未婚化が進んでいくと、やはり非正規で結婚予備軍だっていうふうを考えられた女性たちは、そこから放り出されてしまうわけです。私はそういう女性たちも、もちろんの未婚の男性もそうですけれども、住宅支援の対象とするべきだと考えています。

賃貸住宅に暮らす単身者は、直近の住宅土地統計調査では、平均6割です。これは、高齢の単身者の方も全部含めてです。20~30代に限ってみるとその割合は9割を超えます。若い人々の持ち家へのあこがれもうすれ、景気も不安定になっているので、だんだんと持ち家を購入しない若者が増えていっていることを考えると、今後単身者の賃貸依存っていうのは高まっていくだろうと推測されます。そこで何が起こるか。民間の賃貸住宅っていうのは、加齢の不利を内包しています。高齢になればなるほど、入居する際に不利になっていきます。なので、単身者で、高齢で、住宅に入れないっていう人が、今後もきっと増えていくだろうと予測されるわけですね。

非正規、かつ加齢の不利が加わると、市場での住宅確保は一層困難ということですよ。かつて私が、新宿にあったシングルマザー向けシェアハウスで、インタビュー調査をしたことがあったんですけど。そこであるお母さんが、シェアハウスに入りたいっていうことで相談に来てくれました。そこにそのお友達がついてきたんですね。その方が非正規で40代で、未婚の方でした。その方が、「いいなあ、こんなところあったら私も入りたいなあ」っておっしゃられたんですね。非正規でずっと仕事をしているが、5年ごとに職場が変わる、と。かつては、職場が変わると転居をしたりもしてたんですけど、もうこの年になると怖くて転居ができません。不動産業者に行っても、40代で非正規でっていうと、ちょっとお断りの対象ですよ、っていうふうなことをいわれてしまうと。職場も立地も条件がどんどん悪くなっていく。「いま1時間半ぐらいかけて、職場まで通ってるんですよ」っていうお話をされました。「でも、大家さんがすごくいいんです、娘のようにかわいがってくれてね、いろんなものくれたりとかするんですよ。ご高齢なんですけど」というので、ぎょっ！と思ってしまう。実は、ご高齢のオーナーさんが代替

わりすると、出て行けっていわれるケースも結構ありまして。最近そういうようなご相談も、いくつか受けているんですが、貸し手の状況ががらっと変わってしまって、そこに住み続けられなくなるっていうようなこともある。いろいろと不自由がありながらも、ここに住み続けるのが幸せだと選択されているけど、もしかしたらこの人もちょっとしたこと、住宅を失うかもしれないな、っていうふうに思ったエピソードでした。

(資料の) この下の図に関しては、横浜市の男女共同参画推進協会さんが、非正規のシングル女性の生活状況、すごく苦しいだろうということで、ずっとこのテーマを追い掛けられているんですね。去年一昨年と、私は監修という立場で携わらせていただきました。印象的なところだけ、抜粋してきています。ただ、すごく充実した調査内容ですので、ぜひこのURL⁽²⁾から、検索をして読んでいただけたらと思います。この調査からは、賃貸住宅に暮らす女性たちが、やはり住居費負担率も相当高くなっている、という状況がわかったってこと。民間賃貸住宅に住む人たちが、持ち家とかほかの住宅に住んでらっしゃる方に比較して、将来、いつ何時家賃が払えなくなるかすごく不安だ、という回答が、特に高いっていうのが、明らかになりました。

住宅っていうのは、いつまでもそこに住み続けていていいっていうインフラです。もしかしたら、ここを追われるかもしれないという不安って、相当なストレスだと思うんですが。そういう状況でずっとお暮らしになっている若い人、中年の人っていうのが、相当存在するんだっていうのが、このデータから明らかになったことです。

もう一つが、先ほどお話ししました、LGBTQの住宅問題になります。性もすごく多様でして、私も一から勉強させてもらいました。当事者団体に足しげく通いまして、いろいろとお話をうかがいながら、こういうことかっていうことを頭に入れながら。多様な性を、またここでカテゴライズするっていうのが、矛盾した話なんですけど。だけど、やっぱりいまの社会っていうのは、男で生きるのか女で生きるのかで、全く違う。不利のあり方も違うわけです。なので、性によってカテゴライズをし、困ったことについて、お話を聞きながら、そして、アンケート調査をとってまとめるということをやったんですね。

時間もありませんので、端的に申し上げますと、

やはり同性と一緒に暮らしたいというふうに願ってらっしゃるパートナー、方々っていうのはたくさんいらっしゃるんですけど、それがなかなかかなわないという状況が明らかになりました。まことしやかに、世間では、同性カップルは賃貸市場で拒否される、ということは聞いていたんです。だけど、施策として国に上げていったりするときには、数字で可視化するっていうことが非常に重要だというふうに思っていたので、このアンケート調査を実施したんです。そしたらまあ見事に、「経済的に問題がないのに断られました」とか、「差別的な発言をされました」とか、見えないところで、すごい不利を負ってらっしゃるというような事例が上がってきています。

当事者の方たちは、オープンに自分の性をしていないという方もたくさんいらっしゃいます。なので、不動産業者でどんなに痛目にあっても、外で何か訴えることができない。なので、さらに、その不利っていうのは埋もれていくというようなイメージを抱きました。トランスジェンダーの方についても、今生きている性と、もともとの性が違うということで、最終的な契約の段階で、身分証を出してお断りになられた、というようなことも上がってきています。

どんな性を生きて、誰と生活をして、そしてどこに住むのかっていうのは、自分で選べるべきだし、それが保障されなければならない。だけど、それがかなわない人たちが世の中にはたくさんいるということを突き付けられた調査でした。LGBTQの人たちっていうのは、人口の1割存在するともいわれています。なので、相当多くの人が、そういう状況でいま、不利にあって苦しんでいるんだっていうのは、すごく私にとっては衝撃的でした。標準家族であるとか、婚姻であるとか、さらには血縁っていうものを、不動産業界がすごく重んじることも改めて学びました。シングルマザーの調査のときには、「血縁家族」で住宅を探すので、そこまで非血縁の排除について気づきなかったんですけど。このLGBTの住宅問題に着手して以降は、社会がこれほどまでに、血縁とか婚姻とかすごく重んじる、旧態依然としたようなところが、まだまだあるんだなと愕然としました。

だけど、不動産業界の方たちも、決してこれを排除していいこうという意図ではなく、わからないっていうこと自体が、拒否につながっているところもあるんですよね。なので、われわれの役割として

は、こういうことをちゃんと整理した上で、どういった状況であれば貸せるのか、現行の仕組みをどう改善できるのか、みたいなどを提示していく。これが、重要だと思っています。

(3) 空き家の時代の到来と新たな支援

そして、空き家の時代の到来と新たな支援についてです。住宅市場の大きな変化というところですね。先ほどもいいましたが、20年前にいろいろと調査をしているときには、不動産業者の方はすごく強気ですね。「シングルマザーなんかは家賃せへんで、お金もないのに」、というふうにいわれました。が、やはり空き家が増えてくると、状況というのはどんどん変わっていきます。空き家の増加により、不動産市場も変わりましたが、国の方針も変わった。従来は、公営住宅の直接供給で、住宅政策は、公営住宅しかやらないという方針から、民間賃貸住宅を利用していきましようというところに、大きくシフトしてきた。これはすごく大きな変化でした。

2017年には、新たな住宅セーフティーネット制度が開始しました。住宅に困る人と、それを受け入れる大家さんであるとか、住宅、ハードを持っている人のマッチングみたいものがスタートしたんですね。だけれども、なかなかその制度については、うまくいっていないというのが現状のところ。私はやはり、いろいろ枠組みをつくっても、たとえば困っている人っていうのは、家賃補助が欲しかったり、インセンティブが欲しい。大家さんもそうなんですよ。だけどその両方に、十分にインセンティブが伝わっていないことがあります。

国はですね、標準世帯っていうのはもう幻想で、さまざまな世帯が細分化する時代になったんだ、っていうようなことは認識しています。なので、さまざまな住宅問題を抱える人たちをカテゴライズして、この人たちを住宅確保要配慮者というふうと呼んで、何ら支援をしていきたいと思います。法律では、こういった人々が対象として整理されています。だけど、自治体によっては独自で、困った人を自分たちで決定してよいということになっているんです。そしたらUターンの転入者とか、もう新婚世帯とか、さまざまな人がここに入ってくる、もう全員困っている状態で、そんなんカテゴリーしても意味ないんちゃう、っていうのがいまの状況です。

で、いくら困ってる人をカテゴリーしても、あんまり意味がなくて。やっぱり充実した支援がないと、本当にほとんど意味がない、っていうふうには思っています。さらにいえば、国はカテゴライズしたがるんですね。すごく困っていても、「あなたは単身だから駄目」とか「あなた高齢だからOKです」みたいな感じで、どんどんカテゴリー化をしていくっていうのがすごく得意なんですけど、カテゴリーって、絶対もれ落ちてくる人がいるので、それではあんまり意味がないだろうと。

その一方で、民間による新たなチャレンジがやはり始まっています。これは、空き家が増えたことによるメリットというか、住宅支援の領域では、よかった部分ですね。資料にあるように、民間で新たなチャレンジが始まっています。住宅さえあったら幸せだっていう人もいます。それは、地域につながりがあったり、血縁のつながりがあったり、友人など助けてくれる人があったり、何か困ったときに親身に話を聞いてくれる人があったりって、そういう人にとっては、住宅があるとサバイブしていけるんですが。大抵、住宅がなかったり、住宅にお困りの人っていうのは、社会的に孤立してる人が多い。なので、血縁でかつ1住宅1家族みたいなことを日本は推し進めてきましたけど、それではなかなか難しい。血縁、婚姻だけで、ともに暮らして支え合っていくことっていうのは、既に限界が来ている。血縁や婚姻などない関係性で、ケアを相互に補完していく。そういったことを支援するような取り組みが、いま求められているのではないのでしょうか。

さまざまな取り組みが、全国的に始まっています。皆さん、行政の補助もなく、手弁当で一生懸命、いろいろと工夫をしながら、収益を得る仕組みを作っています。すごい素晴らしい事例です。民間事業者がやられることですので、すごくアイデアが斬新で先駆的で、面白いんですね。どこをマネーポケットにして、どこで弱者を救うかということのバランスもさることながら、全体で採算を合わせるっていうようなことをやってらっしゃるところもあります。いろいろ面白い事例がありますので、ぜひまた、(資料を)お持ち帰りになって、目を通していただけたらと思います。

(4) まとめ：住宅市場・政策どうあるべきか

まとめに入りたいと思います。住宅市場・政策はどうあるべきかという話なんです。まず、整

理させていただきたいのは、家族支援としての住宅政策が、多様で、新しい住宅問題を顕在化させているという状況です。たとえばシングルマザーでいいますと、標準家族からの離脱であるか、撤退であるか、ですね。家族を形成しない単身者。さらには、家族と認めてほしいのに社会的に家族とは認めてもらえないLGBTQの人たち。こういったような不利が、発生していることをお伝えしました。LGBTQの人たちは、非血縁、さらには婚姻関係がないということで、住宅市場から排除されていますけれども。それ以外の人たちも、誰かとつながるといふ仕組みがないと、単独で生きていくというのは、非常に厳しい状況になってきています。どうやって、個になっている人たちをつなげながら孤立させないかっていうことも、ともに考えていかなきゃいけない時代に入っているかと思えます。

最近、深刻なキーワードが世の中にはまん延しています。子どもの貧困もそうですよね。社会的養護、ヤングケアラー、特定妊婦、引きこもり、8050とか、緊急性が高い課題がたくさんあって。さらに、たくさんのいろんな戦略みたいなものが出されているんですけど。いずれも、安心して生きる場を保障されていなければ、解決に導けない点は共通しているかなというふうに思えます。ただ、こういう人たちに対して、積極的に住宅をという具体的な計画はどこにも書かれていない。書かれているのは、公営住宅を使いましょうとか、施設を積極的に使いましょうっていうことばかりで。空き家を使っていこうとか、民間賃貸を使っていこうとか、家賃補助を入れていこうとか、そんなことはほとんど触れられていない。住宅というものが軽視されていることの表れだと思います。

年齢とか世帯型などによる、対象の選別からの脱却、家族主義からの脱却を図って、個人単位の居住支援整備であったりとか、非血縁関係にある者同士がともに暮らす仕組みの整備。こういうものが今後、必要になってくるのではないかというふうに思っています。私のほうからは以上になります。ありがとうございます。

青木：ほぼ時間通りに終わって、ありがとうございました。では続いて、藤田さん、よろしく願いいたします。

実践報告①

藤田：皆さん、こんにちは。よろしくお願ひします。私は、一般社団法人青草の原という団体の代表理事をしております、藤田琴子と申します。今日は居住支援というテーマで、このシンポジウムがあると思うのですが、実際、私は今メインの活動として居住支援をしているかっていうと、実はそうではなくてですね。このあとのお二人へのつながりができたらいいなと思っております。

私がいまやっているのは、それぞれが、自分として大切にされ、愛され、安心できる場所。生きるために必要な栄養と休息を得られる場所。そして、そんな場と出会いをつくっていくことや、広がっていくことっていうのを目的にして、この青草の原という団体をやっています。先ほど、葛西先生のお話の中でも、安心して生かされる場所があるっていうことが、本当に根底に必要だっていうことをおっしゃっていただきましたけれども。本当にそのことを大切にできる場所を、どうやって広げていくのかということに取り組んでいます。

もともと私は、母子生活支援施設という、母子家庭の家族が暮らす施設で2015年から働いていました。児童養護施設だと、皆さん聞いたことあるかなと思いますが、母子生活支援施設というのは、0歳から18歳までのお子さんがあるお母さんとその子どもが、一緒に暮らすことができる、入所の施設です。児童福祉法に定められている施設です。

どんな家庭、家族がそこに暮らすかといいますと、たとえばDVで逃げてこられる方だったりとか、あと、お母さんからの虐待の疑いがあったりっていうのでフォローが必要であったりとか。あとは、経済的に、それこそDVで逃げてきて、離婚の、まだ成立をしていなくて、経済的にもまだ整っていないっていう状況の中で、その施設にいる間にそこを整えていくっていうようなニーズがある方だったり。あるいは、お母さんが障害を持っていたり、病気があったりっていうことで。その中で、お子さんを養育していくのに、近くでサポートしてくれる人がいると安心だなというような家族が住んでいます。

私が勤めている施設は、大体2年間が入所の期間です。それぞれの世帯ごとに居室があって、そこにバストイレキッチンもある、普通のアパートとかマンションと同じような形になっているんですけど、そのようなところで10世帯の親子が

暮らしています。

そこで、どんなことを職員がするかといいますと、お母さんに対しては、生活においての、お部屋に入って一緒にお掃除したりとか、ご飯を作ったりなどのお手伝いもしますし、生活保護を受けるだったりとか、子どもの手当をもらうとか、そういった申請などの手続きも手伝います。子どもがいると、学校や保育園の書類とか、いろいろあるので適宜そのお手伝いをするですとか。あるいは、離婚がまだ成立していない場合ですと、法テラスに行って、弁護士さんをつないで、調停の準備を一緒にしていただくたりとか。あるいは、まだ心も体も元気がなくなってっていうような場合だったら、病院に一緒に行ったり、保健センターに繋ぐということなどもします。

お子さんに関しては、学童保育や預かり保育をやっている、お子さんとも一緒に遊んだりします。遊んでいると、そのなかでぼろっと、家で起こっていることをお話ししてくれることがあったり、ちょっと言動がきつくなってきたなみたいなこととかがあると、大体、お母さんがお仕事でいっぱいになっているときとリンクしたりっていうようなことがあったりもします。そういった中で、家庭に入って行って、いまの状況を聞いて、どうやったら負担が減らせるかなとか、その親子の関係性に関しての相談を聞いたりします。

施設には事務所があるんですけども、よくあるのが、夜になると、みんなそれぞれの居室に戻っていきませんが、ご飯食べてたりとか、お風呂入る入らないとか、夜、寝るときに寝ないとか。そんないろんな日常の中で、けんかが勃発するわけですね。そんなときに、お子さんが泣いて事務所に出てきたりとか、お母さんが「もう無理！」といながら、子どもを部屋に置いて、事務所に駆け込んで来たりとか。そんなことも起こります。そういったときに、それぞれお子さんとお母さんの双方の話を聞きます。「本当はこういうふうに伝えなかったんだよね」とか、「こんな気持ちがあったんだけど、それがずっと言えないでいたから、いま爆発しちゃったんだね」とか。「お子さんに対してこういう期待があるから、それを何とかやってほしいっていう気持ちが強くなって、それが爆発してしまったんだね」とか。いろいろ整理をしたり、次に同じような気持ちになったときにどうしたらいいんだろうという話をして、親子間の調整をしています。

2年間で退所しますが、退所したあとにも夜急にヘルプの電話がかかって来ることがあります。電話で話を聞いて、必要であれば訪問することもあります。「じゃあ、うちに泊まりにおいで」とか、「クールダウンをするためにうちに来ていいよ」ということまでは、公的な施設としてはできません。特に施設のある自治体は、家賃が高いので、そうするとたとえば生活保護の枠の中で住居を探すとなると、子ども二人いても1Kとか1DKとか。本当に狭くて音も十分シャットアウトできないような場所になってしまいます。そうすると、けんかしたときに逃げ場がないっていうような居住環境で暮らしていたりする親子がいるんですね。本当に、そこは住宅の課題だなと思います。せめてもうちょっと広いおうちで、部屋もそれぞれあってっていうことがあれば、虐待の疑いがとか、泣き声通告だっていることもないかもしれないのと思うことがあります。そういったときに、退所したあとも、駆け込めるような場所だったりとか、少しクールダウンできるように、「うちでちょっと見るよ」とか「1泊する？」っていうふうにいえるような場所が欲しいなとは私は思っていました。

あとは、学習支援でつながった子どもが、夜勉強に来ていて、けれどもおうちに帰りたいくないという、そのときの選択肢として、我慢して家に帰るのか、一時保護をしてもらうのか、という選択肢しかないということが、とても心苦しくて。もう少し、公式にいれる場所みたいなところがあったらいいな、っていうふうに思うことがありました。そういう場所がないと、本当に心の中にふたをして、自分の感情を押し殺すようになるか。あるいは、もうそこは諦めて、外に行く。それはたとえば、SNSでつながった、誰だかよくわからない人のところかもしれないし、繁華街のほうに出て、異性のところに泊まるという形かもしれない。そこでのリスクもとても高いため、そのような時に、もう少し安心できる公式にいれる場所っていうのがあったらいいなと思っていました。

なので、公的な施設だからこそできることがもちろんあるのですが、公的な施設の枠組みではできないことを自由に取り組める場所がほしいと思ってつくったのが、「れもんハウス」という西新宿にある一軒家です。ここは「あなたでアルこと、ともにイルこと」を一つのキーワードにして、運営をしています。本当に、ただのおうちなんですけれども、1階に広いリビングやお庭、小さなお泊

まりができるスペースがあって。2階にも2部屋あって、いまは男性二人が1部屋シェアして住んでいます。

ここはいわゆる居場所というような取り組みをしています。とくにここの特徴としては、子どものためとか、若者のためとか、親子のためというような枠組みや対象の条件をつくっていません。なので、小さい子から大人まで、いろんな人が来るような場所になっています。とくに、別に何か困ってる必要もなく、とても元気な人だったり、こういった場所をつくりたいみたいに夢に燃えている人が来たりとか、旅人が寄っていくみたいなことがあったりとか。そんな、いろんな人が交わる、それぞれの人として出会っていくというような場所として開いています。

その中でやっているのが、子どもショートステイの事業です。新宿区では、0から2歳のお子さんは乳児院にお預けをしていて、2歳から18歳までのお子さんは、協力家庭っていう一般の家庭にショートステイをすることになっています。このショートステイっていうのは、たとえば親が入院だったりとか、出張とか、あるいは育児疲れでちょっとしんどいというようなときに、レスパイト、ちょっと休憩することができる、そのためのお泊まりの制度なんですけれども。「れもんハウス」の場合は、協力家庭に登録を、20人くらいのメンバーがしています。そのメンバーで、新宿区から依頼が来たときにその都度シフトを組んでいます。たとえば、仕事終わってから「れもんハウス」に来て、夜ご飯作って、お風呂入れて。また別の人が寝かしつけをして、朝、保育園に送りに行ってから仕事に行くとか。そんな形で、いろんな人が、子どもたちとの暮らしの一部っていうのを一緒に過ごしていくっていうようなことをやっています。

新宿の中でも、レスパイトの利用が一番多いです。その中でも、20代の若いお母さんの利用もあります。先ほどお伝えした母子生活支援施設でも、若いお母さんのニーズとして、自分自身も、子ども期を子どもとして育つことができなかったという方がとても多いと感じます。まだ自分が満たされていなかったり、もっと若いときに遊ばなかったけど遊べなかったっていう思いだったりとか。シングルマザーで頼れる親族などもないと、夜、友達と飲みに行くこともすぐできなかったりして、他の人は実家に預けて行ってるのに、

自分ではできないというストレスがあったりします。そんなときにも、ショートステイを利用して、少し気分転換とかできる、そんな使い方も自由にできる制度なんですけれども。それも結構、まだ自治体によって利用条件等が違って、そういった使い方はできないっていうようなところもあってあります。もう少し、ショートステイが自由に使えるように、広げていきたいと思っているところです。

「れもんハウス」にどんな若者がいるかといえますと、元気な若者も来ますが、いわゆる課題として抽出すると、さまざまな障害や病気があったり、お仕事をなかなか継続できなくてお休みしてるとか、療養中だったり。あるいは社会的養護出身で、頼れる親族がいなかったりする子もいますし、社会的養護出身でも、そうじゃなくてもですけども、家族やお友達も含めて、なかなか助けてっていうのをいうことができない、そういう先がないというような子だったりとか。あとは、お子さんと離れて暮らすことになったお母さん。なかなか一緒に、おうちで育てることが難しいとなって、児童養護施設にお子さんを預けるっていう選択をしたお母さんも、そうやって別れると、関係機関は、お母さんのフォローには入らなくなることが多くて、そういった子どもと離れて暮らす若いお母さんが来ることもあります。

そんな中で「れもんハウス」では、常にオープンにしているわけではないです。その時々で、一緒にご飯を食べたりとか、本当に当たり前だと思える光景ではありますが、実は、楽しいことをしているときに「楽しいね」とか、うれしいことがあったときに「うれしいね」とか、言葉にすることが、「あ、これがうれしいってことなのか」と初めてその時につながるということが起きたりします。あるいは、夜、自分の家にも、寂しくなったり、いろんなことを思い出して苦しくなったりするときに、「れもんハウス」にお泊まりをして、寂しくなる夜を一緒に過ごしていくということとか。いろんなことがあってしんどいときにも、「一緒にいるから大丈夫、大丈夫」っていう言葉を聞きたくって、そこに来る子がいたりとか。そんな日常を過ごしてきています。

この関わりの中で、いろいろ感じていることはあります。一つは、もともと私も母子生活支援施設で働いていたので、家族がいて、その家族の暴力から逃げるみたいなイメージってあったんですけ

れども。「れもんハウス」をやってみて、若者が、家族と折り合いが悪くて逃げるっていうのではなくて。一人暮らしをしていて、その家は安全ではあるけれども、家にいることや一人でいるっていうのが苦しくて、その一人の家から逃げたいっていうようなニーズがあるということは、「れもんハウス」を始めてから、すごい大きなニーズとしてあるんだなと知りました。あとは、実家っていうものが、すごく安心できる場所ではなかった若者でも、「なんかここ、実家みたい」とかいうんですよね。想像する実家みたいなものってというのはどんなものかっていうと、誰かが自分のためにご飯つくってくれたりとか、自分の話聞いてくれたりとか、気に掛けて何か必要なことを用意してくれたりとか。こんなものいる？みたいな感じで手土産持たせてくれたりとか。そんな場所っていうのを、すごい求めているんだなっていうのを感じたりもしています。

そして、具体的な生活の支援っていうふうに書いているんですけども。ここは、若者が一人暮らしをしてたりとか、シェアハウスで暮らしてたりとかっていうのがあったりはするんですが。そのときに、「ハコ」があればOKかっていうと、なかなかそうではなくて。そのときに、精神疾患や発達障害があるなど、色々な理由でお掃除がなかなかできないという子が、自分の力で何とかしなさいとかではなく、誰か一緒にやってくれる人がいることの必要性があります。一人ではなかなかご飯が食べれなくて、そんな気力もないというような若者に対して、ご飯をつくってくれる人がいるとか。そういった具体的な生活のサポートというのが居住支援の中にも含まれていく必要性はあると感じています。

あとは、結構不安定な状態だと、居住場所っていうのを転々とします。新しい環境に行くと、その中で不満や不安がいろいろ出てきて「もうここを出たい」ということもよくあります。そこで、第三者の人がいろんな話を聞くことができると、まだそこにとどまれるというか、慣れるまではそこにいれる、というようなことができます。シェアハウスでも、この人にこういうふうにいわれるから、すごい嫌だみたいなことで、もう引っ越そうかなとなったりするのですが、そういう愚痴を言える人がいないと、そのまますぐ、どんどんまた次の場所にみたいな話になってしまったりもします。その話を少し聞いてくれる人がいるって

うことで、そこにとどまれる。しばらくすると少し落ち着いて、やっぱりこの居心地が少しよくなってきたというふうに思う子もいるなっていうふうに思っています。

なので本当に、一つの「ハコ」があるとか、住める場所があるっていうことの必要性も、もちろんありますが、そこにどのようなサポート、安心が生まれるようなつながりをつくれるかというのも、すごく大切な面だなっていうふうに思っています。このあと、多分お二人から、実際に具体的に、「ハコ」も作りつつ、そこで「ハコ」だけではなく、いろんな関わりの、つながりを豊かにしていく具体的な実践が聞けると思いますので、お二人にバトンタッチしたいと思います。ありがとうございます。

青木：ありがとうございます。では続いて、山中さんからになります。よろしくお祈りします。

実践報告②

山中：シングルズキッズ株式会社の山中と申します。本日はよろしくお願いいたします。私は、東京都世田谷区で、シングルマザー下宿（シェアハウス）「MANAHOUSE上用賀」を運営しています。会社のミッションは「シングルズキッズたちを楽しく、ハッピーにする」。それを、住環境提供から行っています。私は、もともと不動産会社に4年ほど勤めていて、そのときに、シングルマザーを断ったりする経験がありました。それ以外にも、子どもと関わる機会があって。子どもと不動産とお酒が好きで、それを仕事にしました。よくシングルマザーなんですねっていわれるんですけど、私は独身で子どもはいません。

私はシェアハウスに6年間、親子や若者と一緒に同居しながら運営しています。場所は世田谷区にあって、特徴は、平日夜ご飯が、お母さんとお子さんに出ていたり、私や管理人のシニアが、常駐していたり、保育園のお迎えを有料で受けていたり、夜8時まで見守りをしていたり、こういうサービスがついてます。あとは、地域開放になっていて、ふつうそういうDV避難のシングルマザーだと、やっぱり危ないのでクローズするところが多いんですけど、(資料の)右下(の写真)みたいな感じで、うちは本当にいろんな人がお客さんに来ています。ご興味ある方は、ぜひ平日ご飯食べ

にいらしてください。

6年間、親子に、多世代大人数で、すっかり親戚みたいに、あったかく楽しいご飯を提供するハウスを運営してきました。コロナ中も、奇跡的にコロナがまったく出なくて、こんな密になりながら楽しく暮らしていました。運動会一緒に行ったり、私が運転して旅行したり、本当に家族のように過ごしてきました。このシェアハウスを立ち上げて、3年ぐらいたった後に、2軒目を、近隣につくりました。(資料の)左側の桜丘にあるところなのですが、ペット可のハウスになっています。先ほど、琴子ちゃんが勤めてる母子生活支援施設は、ペット連れて来れないので、ペットも家族だから一緒に避難したいっていう方が、いまちょうど実は住んでいます。右側は、千葉県市川市でやっているハウスで、児童養護施設とか里親の家庭を巣立った若者をサポートしている Masterpiece という団体さんと一緒にやっています。ここも、母子家庭の方と若者が暮らす形でやっています。こちらは、ほとんど8割ぐらい、若者が多いです。

最近、ここ1年以内にオープンしたものが(資料)左側の、板橋区役所前。右側は「みたか多世代のいえ」。麻酔科医のお医者さん、在宅医療、末期のシニアの方をケアされてきた方が、ご自身の資本で、母子家庭が4世帯、高齢者が15世帯、学生が2世帯、住めるハウスを作っています。ここが完成したら、私も週3ぐらい住み込んで、おじいちゃん、おばあちゃんと仲良くなろうかなと思っ

ているんですが、まだオープンしてません。先ほどの板橋区役所のハウスは、休眠預金という内閣府の助成金をいただいてつくりました。私、いまも不動産の仲介やってまして、丸々1棟空いていた、空きビルだったものを見つけて、弊社が上3フロアを借りて、下の二つのフロアを、近所の児童養護施設をやっている社会福祉法人さんに借りてもらって、区のショートステイが2階に入ってます。こちらは、2歳から小学6年生までのお子さんを、年間14日預けられる。病気であるとか、緊急のとき見てくれる区の制度、安く預かってくれます。実際にうちのハウスの方々も利用しています。

6棟目は今年3月に豊島区でスタートしました。こちらはシンクルマザーでもある、区議会議員の川瀬さなえ議員さんに、豊島区に母子ハウスをつくってほしいと提言していただき実現しました。オーナーとの面談とか契約とか、近隣のあいさつ

にも豊島区住宅課の方が一緒に来てくれて、フレキシブルに伴走していただきました。今日、この後ご登壇のサンカクシャさんも豊島区で、このハウスから歩いて15分ぐらいのところがあるので、お米をうちももらったりとか、逆に、何かうちももらった物をサンカクシャさんに届けたりとか、そういった連携もさせていただいております。現在は、サンカクシャさんからつながった、もともと地域に住んでいた大学生が住んでいます。

このスキームは、豊島区のホームページとかにも出てるので、調べていただくと見つかるんですけども。やり方としては、NPO法人全国ひとり親居住支援機構が借り上げをして、弊社が運営代行という形で入っています。さらに、豊島区の空き家助成150万円の制度を利用しています。たまたま、新耐震基準といって、そんなに古くない、いまの耐震に適合している物件だったので、住宅セーフティーネット法の家賃低廉化補助金が利用できています。この家賃低廉化補助金は、どこの地区にでもあるものではなくて、予算をつけてくれた自治体のみにあるんですね。豊島区とか、世田谷区も実はつけてくれているんですが、うち、世田谷区にある二つの物件は、旧耐震で古いので、実は対象外となっています。サンカクシャさんの連携以外にも、豊島区にある若年妊婦を支援している認定NPO法人ピッコラーレさんや居住支援法人を長くやられている認定NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークさんからも、お問い合わせやご紹介があって、妊婦さんなどのご相談をもらったりもしています。

このように6棟、34室ある中で、母子のお部屋は23室あります。そのうち、いまはDV避難が3組、入居時仕事をしていない方が、6組住んでいます。私は昔、不動産会社の窓口で働いていて、窓口で無職の方はお断りをしていたんですが、今は受け入れることが多いです。あと、単身者が住めるお部屋が11部屋あり、虐待されてきた履歴がある子であるとか、施設出身であるっていう子が入居しています。

連携については、サンカクシャさんの若者が板橋のハウスと豊島区のハウスに、いままで18歳から20歳の子が4人ほどご紹介で住んでくれました。皆おおむね、親からの虐待があった子たちでした。「れもんハウス」の琴子ちゃんとの出会いは、6年前ぐらいなんですけども。いろんな親子のトラブルとか大変なケースを、琴子ちゃんに泣きつ

いて、こういうときどうしたらいいの？みたいなことを何度も相談させてもらっていました。あとは、最近、新宿区で、夜旦那さんから締め出されて「いま、自転車街をさまよってます」という親子から連絡をもらって。夜11時半ぐらいに琴子ちゃんに電話して、「どうかな？」っていったら、「いまいるんで、いいですよ」というので、あっさり受け入れをしてくれて。お母さんも着いた瞬間、ほっとして泣いちゃうくらい、「れもんハウス」にたどり着いて安心していました。その方は2、3週間滞在してから、ご家庭に戻られました。他にも、うちに住んでいた子とか卒業生が「れもんハウス」を居場所として使っていたり、定期的に琴子ちゃんに相談させてもらったり、とてもお世話になっています。

問い合わせの経路は、自社のホームページと、マザーポートという母子のケアハウスが載ってるサイトからが多いです。あとは普通のシェアハウスポータルサイトや、母子生活支援施設、シングルマザー支援団体、弁護士さん経由で相談が来たりします。あとはDV避難を1回経験して、こういうシェアハウスがあると知ったお母さんが、ママ友がいま大変だから、真奈さんお願いしますとLINEが来たりすることもあります。

実際、問い合わせが来るお母さんたちは、やはりさっきのリサさんのお話にもあったみたいに、学区を変えたくないんですね。いままでの友達であるとか、いままでの関係、地域関係を崩したくない。子どもが楽しそう、すごく子どもは保育園も気に入ってるから、同じ場所にしたいという方もいます。あとは全国、北海道から石垣島までお問い合わせがあって。東京に行けば、まず仕事がいっぱいあるであろう、何とかなるんじゃないかという、無職や非正規の方もたくさん問い合わせが来ます。実際話を聞くと、母子生活支援施設みたいに、ちゃんとスタッフがいて、ケアしてくれる場所のほうがいいんじゃないかというケースも多くて。でも、ペットがいたりとか、門限が嫌だとか、いろんな事情で、行政支援からこぼれ落ちる方々から、こういう民間のシェアハウスにたくさんお問い合わせ来てます。あとは、妊娠中で不安があって誰かと暮らしたい。親と関係が悪い、実家と離れたらいいという方もとても多いです。

実際に住んでるお母さんたちは、同じ地区から、短期のお試し避難、お試し別居としてくる方もいます。1日から、1週間とか3カ月住んで、家庭に

戻った方もいますし、そのまま離婚された方もいます。あとは、家族からのDVは、旦那さんだけじゃなくて、おじいちゃん、おばあちゃんからのDVもあります。おじいちゃんが子どもをたたく、おばあちゃんがお母さん、娘に当たるお母さんに対して、ののしってきて否定されるから、あんな実家にはいたくない、そういうケースもあったり。旦那さんに連れ去られてしまったとか、実家に元旦那さんが乗り込んできてしまったとか、本当にいろんな事情があります。支援措置という、住民票をたどれないようにする措置、警察とか行政に行ってできる措置があるのですが、それをやっている方、2割ほどいます。ほかにも、未婚の方や、家族解散という方もいますね。

若者たちは、家族からのDVです。メインは親ですね。義理のお父さんとかも含まれるんですが。おじいちゃん、おばあちゃん、親戚もありますし。基本的に、保護されなかった子や、親から逃げたい大学生であるとか、施設出身の子がいます。皆さんおおむね、PTSDという精神の疾患を抱えて通院している子や、これから通院が必要だろうなという子もいます。親族の緊急連絡先がない方が多いです。

さっきお話にあったみたいに、ふつうはこれ、一般賃貸って受けないケースが多いんです。私も不動産の窓口をやったときは、「緊急連絡先は、友達は無理です。保証会社に断られますよ」といつてきたんですけど。今のシェアハウスでは「支援団体の人でもいいし、友達でもいいよ。事故とかあったら電話するから、いままでの経緯知ってる人で大丈夫」みたいな感じで、めちゃくちゃ緩くやっています。あとは、生活保護を受給しなきゃいけない子とかは、金額に合わせて減額してあげて、契約書もつくり直したりもします。といったお財布事情に合わせた家賃設定までしています。母子も若者も、連帯保証人とか保証会社はもらってないです。ご本人とお会いして、過去の仕事とか、人柄を見たりとか、貯金とかを確認して、個々の家庭事情に合わせた対応をしています。

私の中で、今日、生きづらさというテーマがあったので考えていたのですが、家族を頼れない、家族の形が変わってきたときに、まず家族を頼れないってところが、生きづらさの正体の一つかなと思いました。

内見や入居のときに、いろんな窓口を教えることがあるのですが、DV避難のお母さんとか、本

当に視野がすごく小さくなっていて。いろいろ調べればあるのに、気づいてないんですね。そういう方に、ハローワーク行って、10万円もらいながら資格取得できますよ、とか、家賃は住居確保給付金に該当すればそれで賄えるので、これの合わせ技でいきましょうみたいなのも、いままで実は、結構何件もやっていたりもしますし。あとは、入居中は子どもと遊んでくれるボランティアさんとかも、ご紹介することもあります。

ひとり親家庭の方は、ワンオペ育児やマンパワー不足に限界を感じていたり、この先の養育に不安を抱えていたり、孤立し孤独を感じている方も多く、6年前に“シニアと地域で母子家庭をサポートする下宿”という事業を企画しスタートしました。

(資料の)こちらの図は、リサさんの勤労収入階層、三角の表をお借りして、いつも使わせていただいているんですが。うち、一番初めは、年収350万から700万ぐらいのお母さんたちを対象に、ターゲットにしてみました。こういう方々は仕事もあるし、家もあるので、生活基盤が安定していて、シェアハウスって、いろんな多様性とか違いがある中で、その違いを楽しんだり、受け入れたりする余裕があるなと思ってました。で、この年収350万以下の方が、正直、シングルマザーのボリュームゾーンになると思うんですけども。全国のいろんなシェアハウスが、この下の方たちを対象でやっていると、軒並みトラブルに巻き込まれ、家賃が回収できず撤退していくっていうことが、たくさんいままで起きています。やはり、生活基盤の不安定さがあるので、伴走者が必要だと思っています。全国の平均年収は、200万円ぐらいになっています。

ハウス運営を3年やって、物件が増える度に、上だけだった対象層を、ちょっと下まで広げました。なのでトラブルの幅も広がってきたのですが、このあとトラブル話をみんな楽しくしたいなと思います(笑)。私みたいな、ちっちゃい動きのいい企業が、頑張っって課題解決やろうとするんですけど、儲からない。と、大変疲弊して、撤退していくというのが、シングルマザーシェアハウス業界事情です。今日、この中にやりたいっていう方がいたら、本当に覚悟が必要ですよとお伝えしたい。

トラブルに対して、福祉素人のただの不動産屋である私は見抜けません。琴子ちゃんって社会福祉士さんで、福祉の勉強をしてきたプロな

んですけど、私は不動産屋なので、わからないんですね。なので、自分ですごい勉強するようになりました。ママたちは自分を責めてる人もいたり、孤独を感じてるお母さんが多かったり。本当に、ママが追い詰められる要因がたくさんあって、お母さんたちに余裕がない。養育費が8割払われてない経済的な問題であるとか、お母さん自体DVで、「おまえなんて役立たずだ」とかいわれて、傷ついてたり。幼少期のトラウマや思い込みもあると思っています。

そんな中で、日本の問題、その生きづらさの正体。やっぱり関係貧困というのが、生きづらさの正体の一つであると思います。経済成長してきた、いろんなものをカテゴライズして、分断してきた結果、関係も途切れてきてしまった。家族さえも途切れてしまった中で、それをあらためて紡ぎ直す住まいが必要だと思っています。私としては、いろんなパートナーさんとやっってるんですが、地産地消や、さまざまなパートナーと協業して、これからも増やしていきたいと思っています。

なぜシングルマザーだけじゃなくて、若者や多世代住居かというところ、でこぼこを埋める構造をつくるためです。(資料の)こので、飛び出たところが、自分ができることとか、好きなことですね。で、このへこんだところが、ニーズや困り事と思ってます。たとえばシングルマザーだと、このへこんでるところが、「誰でもいいから子どもをちょっと見てほしい」みたいな。ちょっと洗濯したいから、ちっちゃい子が危ないことしないか、誰でもいいから見て、っていうニーズ。このちっちゃいニーズから、おっかい、出掛けたいから見えてほしいっていうニーズまで、たくさんあるんですけど。とにかく子どもと離れたいとかもありますし。ここの困り事がある中で、子どもが大好きな若者とかが住んでくれると、めちゃくちゃ子どもをかわいがってくれたりするんですね。そうすると、このでこぼこが、すごいぴったりマッチして、お互い感謝、ありがととか、すごいいい空気が生まれるっていうのを感じていて。

このへこんだ人を集めまくって、同じカテゴリーの人を集めたときに、本当にトラブルが多くてですね。派閥ができたり、けんかしちゃったりっていうので。それを緩和する環境と構造が大事だと思っています。今日先生の話からも、“社会構造”という話があったんですけど、シェアハウスだけではなくて、いろんな場面で、このでこぼこがは

まる学生とシニアとか、互いがはまるような環境と構造ってつくれると思うんですね。それを取り組んでいきたいと思っています。

親子や若者に必要な場所は、ほっとできる、止まり木のような、心のよりどころです。内見のあとに、私も、ただ話を聞いてるだけで、「聞いてもらって精神的に本当に救われました」とメッセージが来たりしてカウンセラーのようになることもありました。傾聴・共感・理解と、ジャッジされない、否定されない、そんな心の居場所が必要だと、6年たってようやく気づきました。

ただ、支援者は、それを一人で担うのはとても苦しいので、複数で役割分担をしたり、今日の皆さん、本当にいつも連携させていただいてるんですけど。こうやって団体とか、行政とか、もう関係ないんで、枠を越えて協力していく市民力の底上げが大事だと思っています。

子どもたちにとってやっぱり一番大切なのは、ママが余裕があって、笑顔があることなので。ママを追い詰める社会じゃなくて、ママにゆとりをつくりたいと思ってこの事業をやっています。

階層を広げてトラブルが増えたんですけども、これを打開する策を、私は見出しまして。しっかりしたルールと契約書ですね。あと、理念を打ち出す。ここで、ある程度カバーできるっていうのは、私の中では見えませんでした。不動産業界と福祉業界の共通言語が本当に少な過ぎるし、通訳できる人がいないので、それがいま、居住支援法人で賄われていない地域もあるんだなと感じていて。われわれみたいな柔軟な民間に委託してほしいですし、福祉も不動産も分かるプレーヤーの育成っていうのが、これから必要ではないかと思っています。

グラデーションのある関わりと理解と住宅支援と、多様性に理解を示していく姿勢が現場では求められる中で、どんな球も受け止めるキャッチャーが社会に必要なだと私は思っていて。支援者研修で学んだのですが、相談員は受け入れちゃ駄目ですと。それは相手のいうことに同意して、なんかしてあげたいとか、行動をアドバイスしちゃったり、一緒に行動すること。そうじゃなくて、受け止めてくださいと習いました。それは相手のいうことに、ただ理解を示すんですね。だから、「死にたい、消えたい」といわれたときに、「なるほど、死にたいんですね」みたいなことを繰り返すとか、「そうですか」っていう、ただそれだけで十分だっ

ていうことを研修で受けました。自分にはわからないとか、共感できないこともあるので、変に投げ返さない。いいも悪いもジャッジしないという、こういうあり方みたいなものが、これが社会で誰もができるようにになると、押しつけられて苦しい、決めつけられて苦しい人が減るんじゃないかなと思います。

親から愛されなかった子たちが、本当に生きづらさの苦しみを抱えている。だからこそ、親に愛されないのは、もう仕方がないっていうのは失礼なんですけど。社会が包括して、子どもや若者を大切にしていく。そういう不動産屋さんや大家さんが増えたらいいです。あとは、誰かが受け止めてくれるっていう社会を、子どもたちに見せるというのが大事だと思っています。ということで、ちょっと過ぎちゃいましたが、今日はありがとうございました。失礼します。

青木：ありがとうございました。では、3人目の最後になります。荒井さん、よろしくお願いします。

実践報告③

荒井：たぶん、もうお腹いっぱいだと思うので、手短かに話したいと思いますが。最後とどめで、社会の闇みたいなものをお見せしたいなと思います。私たち、とくに男子の相談が、いま多いので、男子の闇みたいなものをお伝えしたいと思います。

先に自己紹介だけすると、私、もともと2008年ぐらいからホームレス支援をやっていて、日本の貧困問題とかに15年ぐらいかかわってきました。そのあと子どもの貧困とかで、小中学生の勉強とかを見ていて。それが豊島区で、学習支援のボランティアをやっていたのがきっかけで。それからずっと豊島区で活動してるので。2010年ぐらいから、ずっと豊島区で活動をしています。

さっきお会いしたんですけど、丸山さんという豊島区の不動産会社やっている人がいて。その方のご実家、1.7億ぐらいする戸建ての物件を月3万ぐらいで貸してもらって。っていうのが、サンカクシャの一番最初の拠点だったりするので。そういう方のサポートをいただいております。

今日はあんまり話しないんですけど、私、ゲーム廃人です。1日4時間ぐらい若者とゲームしていて、一時期本当に仕事してなくて怒られてた時期があったりします。最近、若者とパチンコに

行き始めていて、ちょっと本当に終わってます。

サンカクシャ全体としては、居場所づくりとか、仕事のサポートとか、住まいのサポートを行っていて。大体の対象が、ほとんど虐待を受けてるような子たちで。相談の、いま7割ぐらいは男性からになっています。(資料には)15歳から25歳くらいと書きましたが、ほとんどの相談がいま18歳以降。20歳とか過ぎて、行ける居場所がないとか、支援になかなかつながらない、という現状があったりします。資料には3年って書いてあるんですけど、立ち上げて4年たったところで。いま居場所1拠点、シェアハウス3カ所、連携企業とかも30社ほどになって。いま、250人以上の若者のサポートをしています。一人ひとり、若者と結構密にかかわってるので。一人とつながると、本当に3年とか5年とか、かかわっていくので。1増えるだけで相当大変になるっていうのが、いま大体これくらいの数いるかなというところです。

(資料の)このへんはおまけなんですけど、居場所はこんな感じでやっていて。IKEAさんから家具を提供いただいたり。こういうのは豊島区の紹介で、こういう企業につないでいただいて、こんないい感じの場をつくってたりします。ゲーミングPCとか、これは私の趣味が8割くらいなんですけど。結構、若者たちみんなゲームが好きで。若者たちに、居場所来てねとか、相談来てねといっても、なかなかつながらないので。こういうような、若者が来なくなるような場をつくったりしています。こういうのも、ゲーミングPCつくってる会社が、8台無償で提供していただいたりしてるので、本当にありがたい限りです。

これ、超おまけなんですけど。私と、そこにいるサンカクシャのスタッフは、昨日の夜9時から朝5時半ぐらいまで、「ヨルキチ」といって深夜の居場所をやっている。さっきまで寝て、いま来たっていう感じなんで、すごい疲れておりますが。若者たちは、夜、死にたくなったり、寂しくなったりするので、本当に、かなりみんな、元気ににぎわってるのが、この夜の時間帯の居場所かな、という感じです。居場所のやつは、こんな感じです。これがゲーミングPCの部屋で、って感じです。

あと、地域のいろんな方から、仕事の体験の機会だとか、実際に採用していただいたりだとかをしていて。そういう企業は、いま、30社ほど豊島区中心にあります。こういうところで、虐待を受けてきたりすると、知らない人に馴染んで、一緒に

仕事をするとかが難しかったり。そもそも働く自信がないとか、いろんなことをやったりしてこなかったりする。失敗できる場みたいなものが地域にあるといいんだろうな、というので。本当にいろんな体験の機会をいただいたりだとか、うちで若者採用するよとってくれる企業が、結構いま増えてきたりしてる状況です。

本題なんですけど、居住支援に取り組んだきっかけが、一番最初2020年の7月で。ちょうどコロナがあったときで。夜12時過ぎぐらいに若者から電話がかかってきて、その子がホストで仕事やってる子で。八王子でホストやってるんですけど、いまから来いという電話が来て。私、池袋らへんに住んでるんですけど、行けませんという話をしたら。今日お客さんがつかないと、仕事くびになる、と。寮つきの仕事なので家もなくなっちゃうから、困ってるから来てくれといわれて。いや、ホスト行きたくねえと思って、翌日会おうって言って。翌日会ったら、案の定仕事もなくなって、住まいもなくなってっていう形になってしまった子がいました。

そのタイミングでちょうど、さっきの丸山さんの紹介で、こんな物件があるよっていうので、駒込のほうに民泊が撤退した物件があって。ちょうどオリンピックの延期とかがあって、撤退した民泊の業者が結構いて。そこの物件を見に行ったら、よくて。ホストの子が住めるなと思って。財源がなかったんですけど、物件を借りて。事務局の人にすごい怒られて。助成金を頑張ってる書いたら900万ぐらい取れたっていうので、居住支援が始まったというのが一番最初です。

この部屋つくったら、いろんな団体とかから、サンカクシャが住まいの支援始めたっていう口コミが広まって、あっという間に定員が埋まって。定員が5名としてたんですけど、どうしても受け入れてほしいって子が増えて。結局、定員越えて8名とか受け入れたときがあって。そのときがもう地獄で。あとでお話します。

(資料の)ここは、もうほとんど出たかなと思うのでちょっと省くと。虐待を受けてる子がほとんどで、大体の子がもう身分証もない。親が管理しているとかで身分証がなく、本当に身ひとつで出て来た。男子とかなので、ネットカフェとかで生活しながら、日払いの仕事して。たとえば雨で仕事ができなくて、その日ネットカフェ泊まれなくて、そこからずっと路上生活してます、みたいな

子とか。何とか地元から出てきて、東京に行って、親の元からようやく離れて逃げたけれども、東京につながりがなくて、路上生活してました、みたいな若者からの相談が多いような状況です。

いま、どんなことをしてるかという、大体月に15件から20件ぐらい住まいの相談が寄せられるような状況で、常に定員がいっぱいという感じです。もともと1拠点だったシェアハウス、いま3拠点まで増やして、シェアハウスだけで16部屋あって。シェアハウスだけやっていると、共同生活がどうしても無理な子がたくさんいて。そういう子たちを無理やりシェアハウス入れてたから、事件がたくさん起きたので。いま個室のシェルターみたいなものも、5カ所、5部屋用意してるので、住まい全体としては21部屋やっています。家賃がですね、年間1000万ぐらいかかっていて。去年は500万の赤字、という感じです。

いま大体、住まい提供している人数でいったら、五十何人とかに住まい提供して。そこから失踪する子もいれば、きれいな形で自立する子も、ごく少数いたりとか。あとは、サンカクシャの住まい目掛けて、親元から離れたいけどなかなか出れないみたいな。最近だと、ヤングケアラーといわれる子たちからの相談が結構多くて。たとえば自分はもうバイトして、お金を家にも入れて、親の料理もつくったり、おばあちゃんの介護もしたりみたいな感じの子とかが最近多くですね。勢い余って出ればいいよねって思うんですけど、この家に自分がいなくなったら、どうにもならなくなっちゃうんじゃないとか。犬がいてそれが心配とか。いろんな理由で、なかなか家から出れないような子とかがいるので。そういう子が出るような環境の調整を、いろんな役所の人としたりとか。最近、そういうのが増えるかなという感じです。

シェアハウスに関しては、ちょっと資料が古いんですけど、大体月3万5,000円、入居の費用として取ってるんですけど。本当にもう身ひとつで出てきたみたいな子が多いので、最初半年ぐらい、やっぱり家賃払えない子が多いかなという気がしています。その分は、サンカクシャで持ち出しをしたりとか。生活保護を利用する子も、結構増えてきてるんですけど。やっぱり自力でやりたいですとか、大学生とかで生活保護を受けられない子とかも結構いるので。そういう子とかは、本当はどうしようもないなと思ったりしてる場所です。

私たちは、ほとんどが旧耐震の物件使ってることもあって、さっきの何とか何とかみたいのが使えなかったりして。あと、別に不動産会社でもなんでもないので、このへんはすごい下手くそなので、最初の契約書とか本当ひどかったですし。とんでもない感じでやってたところを、山中さんの契約書をちょっと見させてもらって、うちもここを改良しようとか。1個1個、いろんなところを整えていったりしてるので。最近ちょっとルールもしっかり決まってきたり、整ってきて、トラブルが減ってきているというので。やっぱりちゃんと枠組みつくと、トラブルは減るんだなっていうのをすごく感じています。

シェアハウスに、とんでもない子たちをたくさん入れてたら、当然ながらたくさん事件が起きたので。個室のシェルターみたいなものもいま、設けています。大体1ルームで5万5,000円とか、それくらいなんですけど。やっぱり共同生活難しい子をシェアハウスに入れとくと、本当に事件が起きるので。個室のシェルターにそういう子を優先的に移すことをしていったら、事件とかトラブルがだいぶ減ったなというところもあって。

いま21部屋やってますけど、ちょっと赤字がすごいので。どうしようかなと思いつつ、調子に乗って、これから4軒目のシェアハウスをつくる、というところで。相談が来続けるので、とりあえずやっちゃえとやってるんですけど。居住支援だけでいま、団体で3,000万ぐらいかかっているので、さあ、どうしようというところで。役所からの援助は1円もない、団体全体でも1円もないですし。そろそろ予算規模1億ぐらいになるんですけど、来年の予算はほぼ決まってなく。単年の助成金をいっぱい取って回してるみたいな、だいぶ冒険してる経営状況なので。どこまでリスクしようかなっていうのは、すごい感じてるところと。できる限り対応してみ、リスクしよまわって、大変なことになってますっていうのを訴えていくことが大事だなと思ってるので、こういう場でしゃべってるという感じですかね。助けてください、という気持ちです。

写真をお見せします。こんな感じでIKEAさんが、さっきの居場所も100万分寄付してくれたんですけど。私たち、ほんとに予算繰り下手くそで、シェアハウスつくったけど、家具買うお金がないみたいな状況になって。どうしようって言って、IKEAさんにもう1回家具くれませんかかっていった

ら、もう100万分寄付してくれて。本当に、IKEAでしか家具買わないと思って、生きてます。

これがシェアハウスの個室とか、こんな感じで。昔、相部屋をやったんです。定員越えちゃったっていうのもあるんですけど。相部屋やると、とんでもなく事件が起きるので、絶対個室をお勧めします。そうすると、家賃回収が本当にできないので赤字をしょうんですけど。家賃が黒字になって、トラブル対応で死ぬほど人件費かかるっていうのと家賃赤字は、家賃赤字のほうが全然やさしいなと思っていて。どっちもよくないですけど、そんな状況です。こんな感じで、シェアハウスで一緒にゲームしたりだとか、やったりしてます。

こんな感じでスタッフが面談をして。最初、ほんとに担当とか何にもついてなかったんですけど、いまは担当をつけていて。どの若者も、誰かがスタッフついてるといって感じになって。一緒にどうやって自立していこうか、みたいな話をするんですけど。こういう担当がつくと、けんかしたりとかしてですね。やっぱり虐待とか受けてきて、20年ぐらい虐待を受け続けてきて、何とか親元から離れたのに、サンカクシャとかに来て、急に面談してどう自立していきますかっていうのは、なんかちょっとかわいそうだなっていうのをすごい感じていて。本当だったら、休んでもらう時期が結構必要だなと思いつつ。うちらとしては、家賃払ってね、みたいなのが頭にあったりだとか。何となく支援者とかも、自立していくべきだよみたいな価値観が、結構あるっていうのが、意外と彼らを苦しめてるんじゃないのかなっていうのが、すごく反省としてあって。

昨日の「ヨルキチ」とかでも、ちょうどそれに悩んでる子が、本当に苦しいですっていう相談で3時間ぐらい、そこのスタッフが面談をしていて。私、寝てて申し訳ないなと思ったんですけど。そんなようなことがあったりするんで、せっかく家から出て来て、虐待から逃れられたのに、それこそ行政につながって、すごいルールとか制約とか、自立しろとか、納税者になれ、みたいなこといわれたりとかしたり。支援団体につながって、そういうこといわれたりっていうのは、ちょっと暴力的だなぁっていうのを感じながら、どういう支援のあり方がいいんだろうっていうのを、本当に日々反省をし、日々悩んでいるというような状況です。

これは余談です。豊島区の近代産業っていう会社の三村市長が、シェアハウスの物件も貸してく

れてるんですけど、お米1.8トン寄付してくれて。いまシェアハウスは、お米食べ放題になってます。

そんな感じで私たち、基本的には1年半ぐらいでシェアハウス卒業できるといいねっていうので、本当にありとあらゆる伴走をしてるんですけど。身分証の再発行の手続きはプロ級になってきたんで、そのへんは得意ですし。本当に日払いを最初一緒にやろうとか、何か仕事探そうとか、みたいなのをずっと伴走して。引っ越しのサポートとかもして、みたいな感じでやるんですけど。いろんな役所とか、いろんな相談窓口からつながってくるんですけど。相談窓口とかってお金がついてるけど、この1年半とかかかる伴走に、一切お金がつかないっていうのは、すごく難しい問題だなと思っていて。かなり団体で持ち出しをしなきゃいけないっていう現実があるっていうのが、本当に難しいなと思ってます。

いま私たち、居場所の近くに個室のシェルター構えてるので、これがすごいいいなと思って。居場所でみんなでご飯食べて、近場に寝に帰るっていう。これ、シェアハウスより、こっちの形態のほうがいいなと思うんですけど。個室にこもられると、本当に部屋が汚くなったり、まったく出なくなったりとか、連絡取れなくなったりってことが結構あって。ここがすごい悩ましいところだったりしますし。

最後ちょっとだけ、若者とどうやってつながっていくかっていうお話をすると。Twitterとかが、私たち、結構最初の頃は多かったです。私、ふざけたTwitterの、ゲーム配信とかやってたアカウントとかで、サンカクシャのシェアハウスありますとかいうと、本当にTwitter経由でいっぱい相談が来たみたいなことがありました。なんでかという、若者たちって困ったときに、たとえば住まいがなくなったとか、路上生活で困ったってときに、ネットで一応検索するんですけど、役所の情報とか出てきて、なんかめんどくさそうだなと思って、とか。昔、保護されたけど嫌だったから、役所には絶対相談しないみたいな子がいたりします。そうすると、みんなTwitterとかSNSで検索をし始めたりします。そうすると大体、即日入居可とか、仕事も紹介できますみたいな、怪しそうなシェアハウスの情報にいっぱい触れて。そこに困っていると連絡をしたりだとか、向こうから連絡が来たりとか、したりします。そうやって、貧困ビジネスみたいな業者に結構つながることが多く

て。行ってみたら全然部屋と違う、ゴミ屋敷みたいなところに入れられました、とか。急に翌日、よくわからない仕事に連れてかれそうになって逃げしてきました、とか。

そんな感じで、本当に若者の支援が、いま公的支援は本当にないんですけど。こういう業者が受け皿になってしまってるっていう現状があり。私たちも、できる限り彼らにリーチしていこうとやるんですけど。死ぬほど赤字をしようみたいな構造を、どうにかしたいなっていうのを、すごい考えてるので。このあとの時間で、そんな話もできたらいいかなと思っております。いったん、これくらいにしておきます。以上です。ありがとうございました。

青木: ありがとうございます。虎穴に入らずんば虎子を得ずって、すごいびったりだなんて思うような話でした。なかなか難しいことをお三方もやりながら、日々迷いつつも、支援をしてるなっていうのがすごい伝わってきて。たぶんどきないですって、いわないんだと思うんですね。できることを考えるっていうのが、基本になってるなって。話聞いてて、すごいなって改めて思いました。ありがとうございました。

パネルディスカッションと質疑応答

青木: まず葛西さんから、お三方に感想というか、質問というか、まずしていただいて。それからフロアの方に聞いていこうと思っております。では、葛西さんからまずお願いします。

葛西: ありがとうございます。どれも個性的で、楽しいお話をありがとうございました。公的な家出場所であるとか、地域で、行政でもない、完全な民間でもない、第三のエリアといえる空間が存在して、そこに若者やシングルマザーが救済されているということが、状況としてよくわかりました。今日名簿を見ると、さまざまな領域から参加されています。私は長年、母子家庭の住宅問題を研究していますが、従来は、福祉領域の、行政やNPOの方で、会場が埋まるということがあったんですが。最近では、不動産の方であるとか、民間、特に企業の方であるとか、そういう方も混じって、いろいろとお話を聞いてくださる機会が増えてきました。

それぞれのお話の中でも採算面の話は出てきていました。特に荒井さんなんかは借入までしていったというようなお話をされてきました。子どもや若者たちにとって、これらの場所は、すごく重要だと思えます。でもこれは、支援者が疲弊すると続かなくて、そうなる結果的に支援されている側はまた不幸なことになってしまうな、というふうに危惧しています。なので、お三方のお話から、おそらく「儲かってへんやろう」というのは、十分伝わりましたので、どういうところと、どういうふうにつながれば、採算面も含めて継続性を担保できるのか。今日も行政の方がきつといらっしゃるだろうし、政治の方面の方もいらっしゃるだろうし、賃貸の住宅を管理されている方、個人で不動産を持っていらっしゃる方もいるだろうと思います。どんな援助やサポートがあれば、もっと継続的に安定的にやっていけるのかみたいなところを、少しお三方からお話しただけならなと思います。

藤田: ありがとうございます。「れもんハウス」はですね、本当に一軒家なんですね。サンカクシャさんほど、何軒も何軒もってわけではないので。逆にうちは、「れもんハウス」みたいな場所を、自分の団体で広げるといっても、既にある場所を少しオープンにするみたいな形で、地域の人のご自宅などを少し広げて、夜ご飯どうぞ、っていうふうにしてみたりとか、月に1泊ぐらい若者泊まっていよいよ、っていうふうにしたりと。そんな形で、広がっていくっていうような方法を取っていったらいいな、と思ってるんですね。そうすると、すごいいろんな助成金を取ってみたいやり方で回していくっていうよりも、たとえばご近所同士の寄付だったりとか。そういった地域のつながりとか、寄付っていうような中で回していくくらいの、小さなものっていうのが点在していく、そんな形ができればいいなと思っています。

けど、たとえば子どもショートステイに関しては、協力家庭に対して、新宿からは、お子さん一人につき1泊1万円っていうふうな形になってるんですけども。それは、もともと協力家庭、一般の家庭に対して1万円っていうような体なので。コーディネートをするとか、私たちの場合だと、家賃それだけかかっているんですけど、その家賃分だったりとか、光熱費とか、そういったものは換算されてないんですね。うちの場合は、協力家

庭として登録をしているメンバー何人かが、一緒にお子さんを見て、預かるっていう形を取っているんで、その金額設定では全然足りないんです。それがもう少し、コーディネートの費用だったりとかっていうのも含めて、自治体からもらえるような形ができればいいな、っていうふうには思っています。

山中：うちも始めたころは、助成金とかなく始めたので。たぶん2,000万ぐらいは、3棟目までは融資を受けたり、寄付を受けたりで、自前でやってきて。年間200~300万円の赤字を、私が仲介をやって補填するみたいな。なんとかするっていう感じの、駄目な経営をやってきたんですけど。なんなら、自分に給料もちゃんと払えませんが、みたいな感じだったんですけど。

最近では、豊島区の事例で、サンカクシャさんとピッコラーレさんと、他に何団体かやっていると、大手の外資系企業さんが助成金を結構たくさん出してくれたんですね。それが1年間、助成の、住宅の支援と、トラウマインフォームドケアっていう名目で、たくさん予算をつけてくれたっていうのは、本当にありがたくて。行政の助成金とは、また違うものだったんですけども。

あともう一つ、豊島区さんがやっぱりすごくてですね。空き家をシェアハウスに変えるための改修補助金が、3分の2、150万円、出るのはもともとあった制度で今回利用しています。そして大家さん開拓を、豊島区が手伝ってくれたっていうところが大きくなって。それって、うちが大家さんに直接「貸して」といっても、貸してくれないんですね。荒井さんみたいに、たまたま安く借りれたのは、本当に荒井さんの人間力というか、すごいなと思います。そもそも大家さんにアクセスできないし、交渉の仕方も分からないことが多い中で、今回行政主導で物件所有者とつなげてくれるっていうのは、本当に豊島区は先進的で実践的だと思います。

いまいろんな地区から、豊島区さんに、うちの地域でもやりたいんです、どうしたらいいですか？とか、取材が実は、住宅課にたくさん来ているみたいで。実際実現していくには、いくつかハードルがあるとは思いますが、柔軟な行政とのつながりや、民間企業とのつながりがあれば上げられるという可能性はいま、感じています。

荒井：どうしたらいいかなって、聞きながら、話しながら思ったんですけど。サンカクシャだけで、リスクしょっていきますけど、しょい過ぎてもよくないなって気はしますし。どこまでやるの？っていう問いに対しては、あんまり。ほどほどにリスク取りながらやりますみたいな回答をいつもしてるんですけど。団体のことは別に、どうにかするし、どうにかなると思ってるので、そこは気合いでカバーするんですけど。とはいえ、若者たちの現状を見てると、ある種、貧困ビジネスの事業者とか、反社、反グレに、福祉は圧倒的に負けてるといってこの現実には、どう向き合うかっていうのも、考えなきゃいけないなと思ってる。向こうは、構造的に若者を搾取することで、儲けられてるので。活動は上げられるし、受け皿としても、たくさんできているなと思ってる。まず構造で負けてしまってるところに、どう立ち向かうかっていうのは、常々考えていきたいなと思ってる。

なので、とにかくまずは、この課題をちゃんと知ってもらおうとか。民間が身を削って、本当、どの民間の支援団体も、身を削ってやっけてる。なので、そういう現状をまず知ってもらってという機会を、とにかくたくさんつくっていきながら。最近、私たちのところにも、各省庁、今月すごい視察来てくれますし。これからたぶん、もっとそういう人々を、現場に来てもらったりとかしていく必要があるかなと思うんですけど。そうやって、国としても、民間の団体としても、企業としても、地域の人としても、どうやって若者を支えていくのかっていう議論を、もっとできるようにしていきたいなと思ってる。私たちがやっけて、なにが「解」かはわからないんですけど、面白い素材だけは提供できるかなと思ってるので。それをみんなで料理して、どういうあり方がいいかっていうのを考えていく動きは、つくっていききたいなと思ってる場所です。

青木：ありがとうございました。では、いまのお話を踏まえてでもいいです。それから、先ほど聞けなかったこと、話で出たことに聞きたいことがあるとか、そういうのも大丈夫です。これから質疑の時間では、それに答えていくということで、ディスカッションということにしたいと思います。なにかご質問ある方は挙手をしていただいて、話していただきたいんですが。どなたかいらっしゃいますでしょうか。はい。

質問者A：大変興味深いお話で。実は、私も住宅問題をいろいろ、都市の文脈で研究してる者なんです。一つ気になるのが、いまのお話だと、地域のコミュニティであるとか、ボランタリーであったり、行政の力というのは、とても大事だなということだと思うんです。一方で、特に東京の都心の場合は、大手資本がものすごい勢いで投入されている。賃貸住宅を見ても、ものすごい高級な賃貸が増えている一方で、低廉な住宅がどんどん減ってるという事情がある。その中で、今日のお三方の実践が、それぞれ場所を確保してなさってるので、とても興味深いと思うんですけど。今後こんなふうになんと物件が持てるのか。あるいは、いってしまえば空き家ですので、使い道がなくなったものを確保するってことだと思うんですけど。そういうものが出ると（大手）資本がやってきて、つぶして再開発して、立派なマンションにする状況の中で、今後どういう展望が開けるのか。あるいは、それを防ぐ方策というのがあるか。ご専門の葛西先生、あるいは現場の実践の中からも、少しヒントをいただければと思います。よろしくをお願いします。

葛西：大手資本が来る中で、低家賃住宅が減っていき、そして、こういう活動がなくなっていくのではないかと、っていうことですよ。いま現状を見ている限りでは、エリア性にもよるとは思います。空室とか空き家とかで困ってらっしゃる不動産関係の方っていうのは、結構いらっしゃるかなという印象は、私は現場の中では受けているんですよ。なので、空き家を活用した活動は継続できる方向かな、というふうに思っています。ただ、いま空室を使って、こういった若い人たちであるとか、実践家が活動するときに、行政っていうのは、ほとんど絡んでいないんですよ。公的な領域にできることは、そういった支援をサポートしていくこと、つまりは、ルールづくりであるとか、助成などのインセンティブであるとか、そういうことをもっとやっていただかないと、実際に、大手資本に負けてしまうのではないかと、いうふうに思っています。

でも、不動産業界の中には、福祉的な要素であるとか、社会貢献であるとか、そういうことを大切にいらっしゃる方も結構いらっしゃるんですね。私は、この業界に入ったときに、福祉っていうのは儲けを優先して、人を見ていないというふ

うに思っていたんですが、実際はそうではなくて。本当に、自分たちが持っている資本をちゃんと社会のために使っていこうっていう方もいらっしゃるので。そういう人たちの存在も可視化をして、つながって、そして面になって、居住支援を形成していく、そして、継続性を担保していくってことが、やはり仕掛けとして必要なというふうに思っています。

青木：次、どなたいきますか。

荒井：そうですね。私もそういう動きがすごくあるなっていうのと。あと、いろんな企業の方とか、お金持ってる方とかとしゃべったりする中で、希望だなと感じるのは、これ以上お金儲けても仕方ないから、なにか社会のために少しでも役に立ちたい、みたいな人が増えていってるなっていう希望と、そういう人が増えないといけないうのは、すごい感じていて。みんななぜか、若者はやっぱり都市部に集まってきちゃいますし。東京でやっぱり高い家がどんどん増えてみたいところは、すごく肌で感じる部分なんですけど。そういう人たちが一人ずつ現れていって、団結していくっていうことをしていかない限り、本当にこの格差は縮まらないんだろうなっていう気がしています。なので、私たちとしては、そういう人たちを一人ずつ、このとんでもない沼にはめていくみたいなのが、すごく好きです。そうやって、やっていけるといいんだろうなっていう気がしています。

もちろん、協力してもらうからには、すごい向こうが赤字をしょうみたいな構造はよくないなと思って。ちょうどいま近代産業さんが、あえて名前出しますが、2,200万ぐらいの物件を買ってくれて、サンカクシャに貸すといってくれて。サンカクシャが借りるから買う、っていい。彼らは、利回り5パーでいいと。利回り5パーが担保できるような、サンカクシャだと1部屋3万ぐらいあれば、ぎりぎり赤字じゃなくなるってところで。それで、利回り5パーだと、大体これぐらいの金額で買える物件をいま探してくれて。そういう枠組みで、あんまりお金儲けしないで、ただ近代産業側もそんなに負担しないでやる仕組みを、いまつくろうとしてくれてたりする、みたいなところがあって。そういう、あんまりお金は儲からないかもしれないけど、負担はそんなにないみたいな枠組みを、どんどんつくっていか

るといいなどは思っていたりするので。そうやって戦っていききたいなと思ってるところです。

青木：ありがとうございます。ほかにご質問ある方いらっしゃいますか。どうぞ。

質問者B：ありがとうございます。私も居場所づくりを目指している中ですごく参考になったのと、希望を持たせてもらったんですが。おうかがいしたいのは、皆さんがかかわられているような場所に集まる人たちへのかかわり方を、ちゃんとこう、共通認識を持ってかかわれるスタッフさんだったりっていうところ、大事なんじゃないかなと思ひまして。そこをどんなふうを集めていらっしゃるかと。そういった、お互いのシェアリングとかしながらやってらっしゃると思うんですけども。そういった人的リソースの質の確保っていうのを、どういうふうにされているかをお聞きできればうれしいです。

青木：はい。では、どなたが。

藤田：ありがとうございます。「れもんハウス」は、あんまりスタッフという概念がなく。たぶん来ても、誰がどういう人なのかみたいなのが、いまわからないというか。結局、よくわからない場所というか。若者と同行行って、どういう関係ですか？っていわれたときに、なんていったらいいんだろう、みたいな。結局、なにか提供する側、される側みたいなものが、そもそもあまりないような感覚なんです。

それこそ、「れもんハウス」にいろんな人が来るから、ご飯をつくりに来たいといってくる人も、そうやってつくっているんだけれども、自分自身も、たとえばいろいろ睡眠障害があったりとかっていうので働くということではできなくて。それでも「れもんハウス」に来て、ご飯をつくってみんなで食べているっていうことが、すごくうれしかったりとか。あと、なにか貢献しようっていう気持ちで来たんだけど、そこにいる人たちとのかかわりの中で、自分がとても頑張り過ぎているみたいなことに気づいて、逆に元気がなくなってしまう。そんななかで、少しずつ少しずつそこにいる中で、また回復していくような人がいたりとか。

そのなかで、「れもんハウス」が「れもんハウ

ス」としてあるっていうところでは、テーマとして挙げている「あなたでアルこと、ともにイルこと」っていう、その一つのフレーズっていうのを、私たちは大事にしているよっていうこと。そのことを大事にしようとしてくれる人たちが、集まっているっていう強みがあると思っています。なので、やっていくなかで、すごい頑張り過ぎてるなみたいな感じだと、大丈夫？というふうに声掛けもします。場をホストする「イルひと」っていうのをつくってるんですけど、「イルひと」とかも、基本的には、寝てられるぐらいな感じでいてほしいみたいな、そんな感じで伝えていたりします。

対話の場みたいなのはよくつくっています。ショートステイの対応のメンバーだったり、「イルひと」だったりとか、住人メンバーだったりとか、よくこのコミュニティに参加してるメンバーとかとは、よくご飯食べながら、お酒飲みながら、一緒にお話しています。ちょっと気になる部分とかがあると、いま私、こんなざわつきがあるみたいなこととかを共有したりとか。そういうふうになにかルールを決めるっていうよりも、対話でつくっているっていうような感じがあります。

荒井：いま話を聞いて、反省でしかないな、と思ったんですけど。私たち、いまスタッフ20人越えてきてるぐらいで、居住支援が一番チームとしては人数が多くて。何人いるんですかね、いま。数えます、こんど。たぶん7、8人ぐらいいるんですけど。サンカクシャはどっちかっていうと、本当に、明るく楽しく支援してるみたいところが、若者が寄ってきやすい要因の一つだと思って。明るく楽しくみたいなスタンスが、つつい疲れとか、大変さを隠すものにもなっちゃうなっていう気がして。私自身は、休む技術みたいなものを、この15年でちゃんと磨いたりしているので、別に大変な案件抱えてもつぶれはしないですけど。団体全体で、本当どうしていかっているのは、いまの一番の課題だっていう気がしています。

やっぱり若者たくさん会っていると、なんとなくパターンがこうでとか、なんとなくこうなるだろうなみたいなのが、働いちゃうんですけど。昨日の面談もそうですし、若者の本当に生の声に、反省することと葛藤することはたくさんあるので。日々、自信を失ってくんですけど。若者たちの声にちゃんと耳を向けて、反省して、改善して、へこ

む、みたいなのを、私たち自身がやっていかない。その雰囲気、たぶんスタッフ全体で共有できるようにしていかないといけないんだな、っていう気が。本当に支援って、暴力的になりやすくなってすごく思いますし。っていうのを、本当にちゃんと向き合っていないといけないなと思って、いま反省会を一人でやっています。

山中：うちは、私、役員一人で、パートさんが6人。時給1,100円をお支払いして、ご飯つくってもらったり、お掃除1回2,000円とかしてくれるぐらいで。皆さんみたいに大きい組織じゃなくて。大体、私がえいやってやってるって感じなんですけど。そんなに呼ばれることがない、ってのもあるんですけど。ボランティアさんが、見守りで、週1来てくれる方がいたりもします。

青木：ありがとうございます。はい。

質問者C：本日はどうもありがとうございます。私自身ですね、LGBTsフレンドリーな不動産会社を10年経営しております。やはりマイノリティに特化した住まいのサポートということで、シェアハウスの運営などを行ってきました。ですけれども、実際のところ、正直リターンが非常に少なくです。心すり減るっていうことを、非常に長く続けてきたんですけれども。皆さんは、なにをモチベーションに、そしてなにをインセンティブに、チャレンジに取り組みができているのかを、私自身、いま一度皆さんの声を聞きたいということ。そして、たぶんこれを聞いてくださっている皆さまも、なにかにチャレンジしようと思うときに、また同じような壁というか、そういったところにぶち当たると思っています。そういったところをチャンスにつなげるということを含めて、教えていただけますでしょうか。

青木：では、誰からいきますか。

葛西：実践家さんのほうから。

藤田：けど、実際楽しいこともいっぱいあるんですよ。

なんですかね、たとえばすごい私もうれしいなと思ったのは、「れもん留学」といって、家出というか、そうやって来た子が、朝起きて、3人ぐ

らいで窓の近くでぼんやりしながら、ふつうに外を眺めてたら、急に泣き出して。「こんな幸せな朝が来るなんて思ってなかった」とかいって、泣き出すんですよ。隣にいる子とかも、「そうだね」とかっていいながら泣き出して。「うれしいね」とかいって、みんなで泣いちゃうみたい。そういう時間は、ブライストレスだなんていうふうに思います。その後に、そんなふうにいってたのは嘘だったのか、みたいなこともあるけれども、それでも、少しでも思い出したい時間を一緒に過ごせることは、私もうれしいなと思います。

あと、こうやってつながっている人がいるっていうのは、すごい大きな支えだなんていうふうに思いますし。それは、うれしいこともしんどいことも、わーってしゃべれて。「もうお疲れ、みんな」みたいな、そういう関係性があるっていうのは、すごい大事なことだなんて思います。

山中：本当に、モチベーションって難しいですよ。何度も、本当、絶望して、早く宇宙に帰りたいとかいって、神社でお酒飲んでたこともありますし。病んじゃって、海に一人でぼーっとしてたりとか。朝から涙が止まらなくて、動悸がおさまらないことも。それは、ママに呼び出されて、すごい責められたり。超長文の、句読点のない文章が、あなたがおかしい、金払わねえぞみたいなのが、わーっと夜中に、LINEとメールが来たりとかです。本当に、さんざんな目に遭うたびに、こうやって共に取り組む仲間と相談して。本当に救われています。

私自身、好きなことしかできないっていうか。子どもと不動産とお酒が好きで。社会の枠組みにはめられて働けなかったのが、好きなことをしてきました。ハウス運営では大変なことばかりではなく、琴子ちゃんがいったみたいに、うれしいこともいっぱいあって。やっぱり、若者が元気になってきた。「いままで、夕食の準備してる、トントントンっていう包丁の音とか、街で嗅ぐ夕食の匂いが大嫌い、自分にはそういうのがないから。でも、ここにいるとそういうのが聞けて、安心する。これが家族、ふつうの家なのかな」、みたいなこといわれたり。あと、DV避難する前は、本当に笑顔がない3歳と5歳の男の子と女の子がうちに来て、本当に無邪気になった。子どもらしく、わがままもいうし、笑うし、感情表現が豊かになったっていうのをママが感じていて。昔からの友達に、「み

んなにいわれるんですよ」って、喜んでくれることもうれしいし。単純に、子どもたちかわいいんですよね。生意気なんですけど、私を慕ってくれて、遊ば遊ばっていつくれるのも喜びです。

私としては、いますごいお給料低いんですよ。私、生活保護以下じゃない、みたいに思ってるんですけど。好きなことをしているので結構、幸せ。心は結構満たされていますね。

あと私、不動産大好きなんですけど、この業界、覆したいっていう想いもあります。資本主義社会の先を行きたい、住宅ローンの先を行きたいっていうのを目指して。不動産、土地建物を寄付、遺贈してもらう世界に、今年チャレンジしようとしていて。非営利団体をつくって、実家を余らせてる方とかに寄付をしてもらう。いろいろ税金の問題とかあるんですけども、いきなり寄付が難しい方には、寄付の練習をするような枠組みをつくって、共感してくれるオーナーさんにアプローチして、資本主義に抗っていくっていうのも、私のなかですごい楽しいんですよ。これできたらおもしろいな、とっていて。それもモチベーションですし。

将来、海辺に、みんなで暮らせる家を40代でつくりたいなっていう夢がもともとあって。それもすごいモチベーションだったりするので。皆さん、大変そうですけど、意外に楽しんでますよっていうところでした。以上です。

荒井：いや、いい話ですね。みたいなのを聞くのは、1個モチベーションだなと思いましたし。モチベーションってなんだろうなって、あんまり考えてなかったなっていう気がして。

私は、人の弱さみたいなのに触れた瞬間が、すごい楽しくて。最初会ったときはすごいちゃんとして、こいつ優秀だなと思った子が、生活保護のお金で、10万円パチンコで全部すって、うちに家賃払えなくなったっていうのを聞いた瞬間に、あ、人間味があっというまに思っちゃうタイプなので。あんまり参考にはなんないかなって、思うんですけど。

なんていうんですかね。社会が全体的に、みんな納税者になったらいいよね、社会は成り立たないから、みたいな雰囲気とか。大人ってちゃんとしなきゃいけないよね、みたいな、漠然としたそういう雰囲気があるなかで、若者たちが苦しんでいて、傷ついているみたいなことが目の前で起きて

るので。そこに寄り添える人でありたいなと思ったときに、意外と、こうやってちゃんと生活していると、自分がいつの間にか、ちゃんとした大人側に回っていて、みたいなことが結構あったりするので。自分自身の価値観を見つめ直していくっていう意味では、そういう時間がいっぱいあるっていうのは、すごく自分の人生にとっていいことだになって思いますし。若者と、そういうふうに弱さを共有できたとか、一人の人間としてのつながりができた瞬間っていうのが、一番楽しいな思っているんです。そういうのがあるからこそ、たぶん続けられるんだろうなと思いますし。

サンカクシャのケース会議に、死ぬほど愚痴いまくって、みんなで笑いながら、今日のテンションみたいなのでずっとやってるんですけど。そうやって、一緒にいろんな事件を楽しめる仲間がいるっていうのは、すごく大事なことですし。こうやって団体の垣根越えて、そういうつながりがいっぱいあるっていうのは、すごい心の支えだったりするなと思うので。そういういろんなものに生かされて、生きてるなと思うので。

自分たちでリスクしょっていくからこそ、つながる。いろんな人が助けてくれてつながれて、そういう人たちに応援されて生きてるっていう感覚があるので。人に頼れと若者にいつても私たちが、ちゃんと人に頼って、人のつながりって大事だねっていうのを、説得力持っていえるように生きていきたいなと思っている、という感じなんですけど。ちょっと最近は、リスクしょい過ぎじゃないかなと反省をしているので。ほどほどにといいつつ、たぶんこれからもやってくんだろうなという気がしています。以上です。

青木：ありがとうございます。あと、もう一人ぐらいは。どなたかいらっしゃいますか。

質問者D：すみません、予定時間を過ぎてるのに。東京都の市部で市役所の職員をしています。ずっと福祉部門の仕事をしていて、去年、居住支援の担当部署に移ったところなんです。今日、いろんなお話を聞いていただいて、ありがとうございます。行政の話が出てくるたびに、ちょっと耳が痛い感じだったんですが。私自身はなるべく地域に出て、地域の方とつながればと思いながら活動しています。つながって、個人間の話とかはできるようになっても、なかなか行政も、い

ろんな助成金だとか補助金だとかの準備はしているところも多いかと思うんですが、実際にはたぶん利用につながらない。利用につながらないような支援も、すごく多いなって思っているところです。現に荒井さんは、行政の話で、全然使ってなくて、単年の助成金をいろいろ使ってどうにか、っていう話を今日されてたかと思うんですが。実際、いろんな行政の支援とかを見ていたときに、余ってしまうような支援って、ポイントがずれているようなものなのか。たとえば手続き上すごくめんどくさいとか、そういったものなのか。できればつながっていきたいと思う行政としては、どのへんが改善されるといいんだろうなと考えるのですが、現場で活動されてる皆さんのお話が聞けたらと思って。ぜひお願いします。

青木：じゃ、荒井さんからいいですか。

荒井：えー、どうしたらいいんですかね。役所もいろんな制度があって、使えるものとかはあるんですけど。どれも使おうと思ったこと1回もないなと思って。ないんですよ、ぴったりのものが。っていうのは、ものすごい感じていて。これは、魂売ったり、対象者絞れば使える、みたいなものはいっぱいあるんですけど。基本的に、取りこぼされてる子に対しての支援やっていると、基本的に行政のお金はやっぱりつかないっていうのは、東京は特にそうかなという気がして。たぶん地方とか行くと、もうちょっとゆるっとやってるみたいなのはあったりする。もうちょっと東京も変わってほしいな、っていう感覚はあったりします。

あとは、これいったらもうおしまいだなと思うんですけど、価値観が違いすぎるので。役所と若者の価値観って、もう真逆なので。基本的に役所のエッセンスが入ったものって、若者は使いにくいっていうのはあって。それこそ、人の弱さみたいなとか、支援者としては駄目な部分みたいなのは、彼らの親近感を生むので大事なんですけど。役所はその対局にいるので。ちゃんとしてなきゃいけないとか、ルールをちゃんとしてなきゃいけないとかって、この価値観がまったく合っていない若者たちに、どう支援していくんですかってなったときに、そりゃやくざとかのほうが相性いいわな、みたいなのをすごいってしまうので。

どう向き合っていきますかっていうのを、一緒に考えていきたいなと思っていて。よく、いろんな

話をしてますし。どうしたらいいすかね、っていうのはよくいっている。まあでも、こういうところに来るいい人たちが、こういうのを知って頭悩ませて。その他大勢はたぶん、興味ないみたいな感じだと思うので。役所のなかの人の存在って、すごい大事じゃないかなと思うので。戦っていただけたらうれしいなと、思ってます。

青木：どうぞどうぞ。

山中：建物と、人に対する助成金があると思うのですが、建物のほうは、住宅セーフティーネット法の専用住宅で、10年間住宅要配慮者に貸せば、1部屋当たり100万円の改修費を出しますよっていうのを、国土交通省で実施しています。ですがこれ、大家さんにめっちゃ評判悪くて。縛りが結構強いんですね。10年間、住宅要配慮者以外に貸しちゃ駄目だと。それって、この賃貸市場の荒波のなかで、お客さんがつくかわからないのに、10年もそれだけに貸せというのはなかなか難しいです。また、家賃低廉化補助金がある地域では4万円出るんですけど、四半期に1回の支払で、毎月くれないんですよ。ふつうの大家さんには、嫌がられることが多いと思います。大家さんのメリットがないっていうのは、残念ながら、住宅セーフティーネットはいわれていて。国交省もそれに、改善に向けてとっても頑張ってくださいってはいえると思います。

あと、旧耐震物件。昭和56年以前に建てられた、現行の耐震基準を満たしていない物件に対しての対応が難しく。そこに木造の耐震改修費を、たとえば世田谷も出してしてくれてるんですけど。大家さんに、凶面を起こしてもらったり協力してもらわなきゃいけない。大家さん、お金出るからやりましょうっていても、たぶん大家さんへのメリットが目に見えて感じられる訳ではないですし、費用まで負担してもらうのは難しいです。そうなるとうちが結局、改修費出さなきゃいけないんですけど。でも、それだけのリターンがないんですよ、シェアハウス。トラブルで空きが出たとか、そもそもプラスがないので、投資ができないっていうところがあったり。建物への助成金はあるんですけど、使いづらいというのが正直なところなんです。

あと、入居者さんには、住居確保給付金という、厚労省がやっている制度で、東京都だと単身世帯

で5万3,700円、母子二人6万4,000円、3人6万9,800円の家賃が3カ月出て、3回更新できる制度がとてもよかったですし、コロナのとき困っていた親子が数組利用しました。リサさんにもよく話してるんですけど、旧耐震だろうがなんだろうが関係ないんですね。その人の、2年以内の就労状況とかで見てくれるので、厚労省最高！という話をよくしてきて。人に予算をつけるって家賃補助、リサさんはよくおっしゃってますけど。建物じゃなくて、人にある予算が増えてほしいのと。

あと、みなさん、住居確保給付金という制度を知らなかったりします。そういう難しい漢字もやめてほしいですね。住居確保給付金とか、家賃低廉化の「廉」とか読めないよみたいな、若者、って。私も読めないぞ、みたいなのあるんで。

あともう1個、窓口ハラスメントにみんな苦しんでいて。窓口の人がめっちゃいい人な場合は、ラッキーなんです。ただ、なかなかなくて。若者とかお母さん一人で窓口に行くと、「そんな制度ありません、知りません」、とか言われたり、部署をたらい回しにされたり。嫌な思いして、もう諦めますみたいな人が、たぶんいままで何人もいました。サンカクシャさんとかちゃんと同行してくれるし、「れもんハウス」さんでもやってくれるのはありがたいですよ。そもそも弱っている人に対して接するやり方を、行政窓口をする人に、もっと学んでほしいっていうのをお願いしたいなと思いました。ありがとうございます。

藤田：自治体の助成金は、これ出したいなって思うのがあったのですが、細かいんですね。申請の段階で、たとえばなにかを印刷するんだったらどこにお願いしようと思って、印刷何枚しようと思って、その予算がいくらぐらいなのかみたいなところまで、出さないとけない。細かすぎて、その割に額がそんなに高くないから、ここにその労力を掛けて出すっていうのは、っていうふうに思うことはあるなと思います。

あとは本当に、先ほどお二人もいったように、民間もはみ出し、行政側も少しずつはみ出すというか、染み出すというか、それが本当に大事だになっていうふうに思っています。そこは、政府の枠組みっていうよりも、本当に行政のなか、それこそ窓口の人だったりとか、そこで実際にやってる人が、こういうふうこれを捉えれば、ここまで染み出せるかもしれないみたいな。そこでつ

ながれる部分っていうのはあるのではないかなと感じるところはありますね。だから、染み出しつつ、つながっていったらいいなって思いますし、そうやって染み出そうとしている方が、その管轄の中で一人でもいて、その人とつながると、とても心強いし、希望が持てるっていうふうに思います。

青木：ありがとうございました。まだたぶん、聞きたいこととかいろいろあると思うんですが。すみません。本当に、2時間半という詰め詰めの工程でやってしまったがために、なかなか皆さんの聞きたいことを聞くことができず、本当に申し訳ございませんでした。お時間になりましたので、これでいったん終了ということにさせていただきます。

最後、締めるに当たって、ひと言お伝えしたいんですが。まず、今日遠隔で聞いている、社会福祉研究所の所長である菅沼から、コメントが届いておりますので、お読みします。本当は、声が出るはずだったんですけど、ちょっとトラブルがあって、私が読み上げさせていただきます。

葛西先生、藤田さん、山中さん、荒井さん、本日は大変重要なお話をありがとうございました。また、たくさんの方、さまざまな分野の方にご参加いただきまして、主催者として大変うれしく思います。これまでの社会福祉研究所のシンポジウムとは異なる分野の方が参加されていて、本日の居住支援というテーマが、既存の社会福祉の枠を超えて、多くの方の関心をひくものであるということがよくわかりました。内容は大変深刻で、支援者として大変な苦勞をされているのに、楽しくお話をされていて、その点大いに勇気をもらいました。皆さんの新しい問題を受け止める感性と、柔軟な態度が本当に大切だなと思いました。本日のシンポジウムを通じて、若者の居場所を作ることに、民間、行政、アカデミズムが関心を抱くようになり、実践のネットワークが充実するきっかけとなれば、大変うれしく思っております。本日はありがとうございました、菅沼。

ということで、所長からでした。また、企画者からも一言、お伝えしたいと思います。まず今日、第一線で活躍している人たちと、その研究者をお呼びして、若者の居住の支援に関して、現在の位置と今後の指針を、みんなで共有しようという意味合いが今回はありました。葛西さんは、明

日もイベントがある。そして、他の皆さんもいろいろ予定が詰まっているにもかかわらず、本当に、今日4人がそろうというのは奇跡だと思っています。そんななかで、本日は話をさせていただきます。本当に4名の皆さんには感謝しております。ありがとうございました。

改めて、感想というか、話をさせていただきたいんですが、まず一つは、居場所というところだと、藤田さんの話を聞きながら、ふと自分も高校時代を思い出して。なかなか家族に問題があったので、自分も居場所を求めていたんですね。それが公民館だったんですね、私の場合は。やっぱり話を聞いてくれたんですね。よくよく話聞いてくれて、大学受験のこととか、いろいろ相談に乗ってもらえたっていうことがあるので。私は働きながら研究をしている身ではあるんですが、いまそういうのができるっていうのは、そのとき出会ったからなんだなって思うんですね。そういう助けてくれる人とか、話を聞いてくれる人が、早く、早い年代、時代で見つかると、たぶんその後の選択っていうのは全然違うんだなっていうのは、話を聞きながら思いました。

もう一つは、以前にも聞いて、今回も話が出ましたが、不動産と福祉の分野の共通言語の話がやはり印象的。まずもって、そういう場をつくる場所がないということで。不動産には不動産の論理があり、福祉には福祉の論理がある。なかなかそれがかみ合わないの、じゃあそれ、どうするんだっていう話は、以前ちょっと聞きましたし、いまも出ました。たとえばそれが福祉の現場だと、自立支援協議会とかいろいろあるんですが、それは自治体によって全然違いますし。まだまだこういった福祉の現状と、不動産の論理みたいな、それらをつなぐのは、話をする場、聞く場というのは、ほとんど、たぶんないんだろうなと思っています。

菅沼からも話がありましたが、今日この場が、知るきっかけになれば幸いだと思っています。改めまして、本日は非常に暑いなか、皆さまに参加していただいたことを、本当にうれしく思っております。皆さん、ご予約を空けて、立教大学にお集まりいただきまして、本当にありがとうございました。では、登壇された4名に大きな拍手をお願いします。

それでは、これにて第56回社会福祉のフロンティアを終了したいと思います。ありがとうございました。

注

- (1) 会場で投影され、参加者にも配布された資料には、葛西氏が執筆した以下の書籍4点が紹介されていた。
上野勝代ほか編著. 2013.『あたりまえの暮らしを保障する国デンマーク——DVシェルター・子育て環境』ドメス出版。
葛西リサ. 2017.『母子世帯の居住貧困』日本経済評論社。
葛西リサ. 2018.『住まい+ケアを考える——シングルマザー向けシェアハウスの多様なカタチ』西山卯三記念すまい・まちづくり文庫。
葛西リサ. 2022.『13歳から考える住まいの権利——多様な生き方を実現する「家」のはなし』かもがわ出版。
- (2) (公財)横浜市男女共同参画推進協会が2023年に公表した「横浜市の単身世帯の住まいの状況・ニーズ調査報告書——シングル女性の課題を中心に」が掲載されているウェブページ (<https://www.women.city.yokohama.jp/wp-content/uploads/2023/04/4f19691ee80c948a6f0419911c5c6726-1.pdf>) のこと。